

2022

LITERARY WORKS



令和4年度

の  
じぎく  
文芸賞

兵庫県・公益財団法人兵庫県人権啓発協会

## 発刊にあたって

少子・高齢化、国際化、情報化の急速な進展、人々の価値観や生き方の多様化など社会環境が著しく変化する中、人権課題もますます多岐にわたari、複雑化しています。インターネットによる人権侵害、職場や学校でのいじめ等の課題に加え、外国人や性的少数者の人権、さらに最近では、新型コロナウイルスの感染者やその家族、医療従事者等に対する誹謗中傷や差別的な扱いなど、様々な人権課題が新たに発生しています。

兵庫県と（公財）兵庫県人権啓発協会では、日常生活の中で人権の尊重が文化として定着している社会をめざして「人権文化をすすめる県民運動」を市町と共に展開しています。「のじぎく文芸賞」もその取り組みの一つであり、文芸作品の創作や鑑賞をとおして県民の皆さんに人権について主体的に考え、豊かな人権感覚を身につけていただくことを目的に公募事業を続けて参りました。二十九回目を迎える本年度は、一、四一五編の作品が寄せられました。いずれも、人の優しさや思いやり、支え合うことのすばらしさ、生命や人権の尊さ・大切さなどが綴られた力作ぞろい、平成六年の第一回公募以来、応募総数は二五、四四二編となりました。

ご応募いただいた作品の中で優秀なものについては、ひょうご人権ジャーナル「きずな」やラジオ番組での人権啓発に活用して参ります。作品づくりをとおして育まれた人権尊重の心が県民の皆さんに広く発信され、人権文化の定着がいつそう図られることを期待しています。

本作品集には、本年度の応募作品の中から、最優秀賞三編、優秀賞八編を収録いたしました。県民の皆さまにお読みいただくと共に、人権啓発や研修の場でぜひご活用いただき、日常生活での実践につなげていただくことを願っています。

また、多数の作品について、慎重かつ厳正な審査をしていただきました審査委員の皆さまに、この場を借りて心よりお礼申し上げます。

最後になりましたが、今後とも「のじぎく文芸賞」をはじめさまざまな啓発事業などを実施し、県民のみならず、人権意識の高揚や人権文化の創造に努めてまいりますと存じますので、どうぞよろしく願います。

令和四年十二月

兵 庫 県

公益財団法人兵庫県人権啓発協会

# 令和四年度 人権問題文芸作品「のじぎく文芸賞」受賞者

名前	作品名	部門(部)
〈最優秀賞〉		
三年三月 田中杏実	心の種 心に寄り添うということ	小説(一般) 随想(学齡児童生徒)
※詩部門 最優秀賞 該当作品なし		
パク ヘレナ	ふれる	創作童話(一般)
〈優秀賞〉		
先間 美保子	シマトネリコの木と僕	小説(一般)
工藤 容子	黒猫かあさんと三匹の仔猫	小説(学齡児童生徒)
細川 佳織	心のバリアフリー	随想(一般)
笠原 世莉奈	物忘れ	随想(学齡児童生徒)
ひの 朱寢	今日も	詩(一般)
近藤 葵	キャンパス	詩(学齡児童生徒)
松末 真理子	よい子の似顔絵	創作童話(一般)
船引 里音	ぼくはロボット	創作童話(学齡児童生徒)

〈佳作〉

阿部忠彦  
櫻井日生  
樋川あずさ  
中嶋美鶴  
鍋島えり  
塚口佳子  
関音愛  
瀧祐太  
權影人  
森本歩愛  
岡部姫愛  
野村徹  
前川珠紀  
山下治美

告られて、僕は少し大人になった  
パースデーケーキ

大人の世界も、いじめがあるよ

はるかぜ

蓮の花日記

我が姉に、想いは深く

しょうにがんのこどもたちのために

おじいちゃんの悩み

ひでおさんと僕

人見知り

私

山の上の王さまと山の下王子さま

うーさぎさんとかなか

パパマレンタル

小説(一般)

小説(一般)

小説(一般)

小説(一般)

随想(一般)

随想(一般)

随想(学齡児童生徒)

随想(学齡児童生徒)

詩(一般)

詩(学齡児童生徒)

詩(学齡児童生徒)

創作童話(一般)

創作童話(一般)

創作童話(一般)

# 目次

【総評】	審査委員長	林	芳樹	1
【部門別審査講評】	各審査委員	2		
【最優秀賞・優秀賞作品】				
《最優秀賞》				
〈小説部門〉	心の種	三年三月		19
〈随想部門〉	心に寄り添うということ	田中杏実		30
〈創作童話部門〉	ふれる	パクヘレナ		33

《優秀賞》

〈小説部門〉

(一般の部)

(学齡児童生徒の部)

シマトネリコの木と僕 …………… 先間 美保子 ……  
黒猫かあさんと三匹の仔猫 …………… 工藤 容子 ……  
52 39

〈随想部門〉

(一般の部)

(学齡児童生徒の部)

心のバリアフリー …………… 細川 佳織 ……  
物忘れ …………… 笠原 世莉奈 ……  
63 59

〈詩 部門〉

(一般の部)

(学齡児童生徒の部)

今日も …………… ひの 朱 寝 ……  
キャンバス …………… 近藤 葵 ……  
67 65

〈創作童話部門〉

(一般の部)

(学齡児童生徒の部)

よい子の似顔絵 …………… 松末 真理子 ……  
ぼくはロボット …………… 船引 里音 ……  
73 69

◆令和四年度応募作品の内訳

合計	学齡児童生徒 (中学生以下)	一般 (高校生以上)	部
			部門
24	6	18	小説
1,071	1,019	52	随想
303	270	33	詩
17	1	16	創作童話
1,415	1,296	119	応募総数

◆令和四年度審査委員

林 芳樹(総括)  
時里 二郎(詩)

野元 正(小説)  
尾崎 美紀(創作童話)

三浦 暁子(随想)

新聞で読んだ話です。

交通事故で障害の残った男性がいました。外見では分からないので、訪問看護師から勧められたヘルプマークをバッグに付けました。ある日、買い物を済ませてレジの列に並んでいたら、子どもを連れられたお母さんが「お先にどうぞ」。礼を言うと、マークを指さして「お互いさまですから」。

新聞から、もう一つ。難病を患ってマークをバッグに付けている女性の話です。乗った電車は座席がすべて埋まっていました。仕方なく優先座席の人へマークを示し、勇気を出して「譲っていただけませんか」。誰も立たないのを見かねた別の座席の女性が譲ってくれたそうです。優先座席はと見れば、若者がスマホに夢中。

ヘルプマーク。見た目には分かりにくいハンディや疾患のある皆さんが付けます。2012年に東京都で始まり、広く知られるようになりました。歴史はまだ短いのですが、兵庫県内でも見かける機会がかなり増えてきました。

今年度の「のじぎく文芸賞」では、詩部門の優秀作で読みました。1415点に及ぶ全応募作に目を通したわけではありませんが、きつと取り上げた作品がいくつもあったことでしょう。

支え合うこと、助け合うことが社会の大事な基礎です。この文芸賞の審査をするたびに教えられます。でも、赤地に白い十字とハートをあしらった分かりやすいマークが語りかけてきます。

言葉のうえだけでなく、本当にそう思っていますか。思うのなら、街角や乗り物の中で行動に移せませうか。バッグで揺れるマークが、そう耳元で。



## 部門別審査講評

### 【小説部門】

審査委員 野元 正

《審査総評》（一般の部と学齢児童生徒の部を含めて）

今年度の小説部門の応募総数は、24篇でした。その内訳は一般の部18篇、学齢児童生徒の部6篇です。令和3年度よりやや減少していますが、ほぼ例年並みと言えますでしょう。

テーマとしては、「人のやさしさやおもやり、支え合うことのすばらしさ」についてが最も多く、個別のテーマを挙げると、LGBTs、社会からの孤立、不登校、理解ある友人の存在、個性の尊重、多様性の大切さ、虐待、DV、未成年の不当就労の強要、教師のパワハラなど。

選考の基準は毎回お願いしていますが、読後にテーマが自然と浮かび上がってきて、読者にその大切さを感じさせる作品を選んだつもりです。

最後にすべての作品にお願いしたのは、原稿用紙の書き方の最低限のルールを読者に読んでもらうという気持ちで守ってほしいことです。

〈最優秀賞〉（一般の部と学齢児童生徒の部を併せた全作品より）

作品名「心の種」 三年三月

家庭の事情で転校を繰り返してきた僕は、中学生になると、強く孤独を感じるようになり、その不安と葛藤から不登校になる。そんなとき、僕はケンジと友達になる。その晩、無口だら友達ができたかなという思いが心の種の栄養になった。しかし10代の子の電車自殺のニュースに接して心が揺らぎ、再び不登校となる。夢の中で僕は誰かから遠足に誘われる。夢を見た翌日の夕方、ケンジ

が我が家を訪れ、僕を遠足に誘い、登校を促す。どうにか登校できた日、クラスメートはさりげなく歓迎してくれた。僕は遠足にも行くことができた。

それから12年、僕たちは今も心が通い合う友達だ。これは、不登校になった僕が友達を得て、次第に立ち直っていく過程を繊細な心理描写と平易な文章で描いた読後感が爽やかな秀作だ。

〈優秀賞〉（一般の部作品より）

作品名「シマトネリコの木と僕」 先間 美保子

僕が総合失調症という病気を発症したとき植えたシマトネリコという木は、日照りなど劣悪な環境に耐えて大きな木に育った。それと同じように、父が言うゆっくりとした回復に向かって精進していきたくも思っている。見た目は分からないが、このような病気があることを理解してほしいと訴えるこの作品は心に響くものがある。特に電車の中で朝飲んだコーヒートの濃さが心に引っかけたりパニック症状を起こす僕を見て、恐怖を感じた乗客の母と少女。母親は慌てて隣の車両に移ろうとするが、少女は車内中吊りの障害のため戸惑う人びとの絵に気づき、母娘とも静かに座り直す場面が何よりも鮮明な印象を読者に与える。

また、「人のやさしさや思いやり、支え合うことのすばらしさ」や「人権課題の解決に向けて明るい展望をもって描かれている」といった人権の課題に沿った作品だ。

〈優秀賞〉（学齢児童生徒の部作品より）

作品名「黒猫かあさんと三匹の仔猫」 工藤 容子

庭にやってきた黒猫に興味をもった主人公「妹」はその黒猫を観察し始める。その黒猫は赤ちゃんを産む場所を探していたのだ。妹はやがて庭の片隅に置かれたりサイクルに出す予定の化粧箱に

3匹の仔猫を発見する。そしてかわいそうに思った妹は、引き取り先を探し、折良く3匹とも引き取って育ててくれる人を見つけるが、その日、仔猫は一匹しかいなくなる。親猫が他に運んだのだ。野良の黒猫親子と妹との心温まる交流が巧みに描かれている。

動物愛護も人の心によつては動物虐待へと変化しうるし、生命の大切さは動物であっても何ら変わらない重要な課題と言える作品だ。

〈佳作〉（一般の部と学齢児童生徒の部を併せた全作品より）

作品名「告られて、僕は少し大人になった」

阿部 忠彦

僕は、親友の晋太郎から「愛してる的告白」を受けたことを母に相談。父は戸惑いを隠さないが、母の意見ー親友である晋太郎の気持ちを大切に思うことだけど、それは親友の晋太郎だからではなく誰に対してもそうあるべきという。そして僕は晋太郎に伝える。カミングアウトを僕にしてくれた感謝とその思いを尊重すると告げる。むずかしいLGBTsのテーマを分かりやすく巧みに描いた佳編だ。

作品名「パースデーケーキ」

櫻井 日生

私は、有名大学を卒業したが、マニユアルどおりの仕事はできるが、応用編になると、パニックってしまう。そんな私の最初の仕事はネットの求人広告の営業だった。長年、家族でやっている、美味いことで有名なラーメン屋だが、小さな犬小屋みたいな店だった。場の空気が読めずに無意識に汚い店と言ってしまう、店主の怒りを買ひ、破談になる。私は上司の叱責に堪えられず退職する。それから様々なアルバイトをするも長続きしない。そんなとき、会社の経費伝票をエクセルに打ち込む単純作業に従事することになる。私の丁寧な仕事ぶりを見ていた上司はケーキ屋に私を誘い、

私の仕事を褒める。褒められるのが初めての私は、やっと自分の居場所を見つけたような気になる。発達障害かもしれないハンデを乗り越え、良き理解者と巡り会い前途が開ける物語だが、誰にとっても励みになる秀作だ。

作品名「大人の世界も、いじめがあるよ」 樋川 あずさ

千種は地元を出てから7年過ぎたが未だ友達がいらない。この物語は中学時代と現在の職場を交互に描写しながら、母から送られてきた10年前のタイムカプセルの作文などから幼友達の市川伊保子と同じ幼馴染みのカコをいじめていたのを知りながら見て見ぬふりをしていた過去を反省する。そして現在、職場の上司余越課長が、精一杯頑張っているが少し手の遅い同僚をいじめる日々を見ている。千種は中学時代のいじめを見て見ぬふりをした自分を恥じ、家庭の憂さを職場でのいじめで発散しないよう上司である課長をたしなめてしまう。

表題の「大人の世界も、いじめがある」ということに敢然と立ち向かう話だ。作品として少し登場人物が多く戸惑うが、中学時代の過ちと対比しながら、大人の世界のいじめを題材とした作品は珍しく価値ある作品だ。

作品名「はるかぜ」 中島 美鶴

高齢な吟さんという女性の生涯を回顧し、賞賛するエッセイ的小説だ。吟さんは、おそらく昭和の厳しい時代に産婆として自立しながら、女性としての自分の人生を投げ打って早世した兄の女の子を育て上げる。しかし、その子が兄の子でないことが分かってからも、落胆はしたものの最後まで面倒を見て自立した女性として育て上げるという物語だ。この作品は、「人のやさしさや思いやりと支え合うすばらしさ」を具現化したものだと思う。

《審査総評》（一般の部と学齢児童生徒の部を含めて）

今年度の随想の応募総数は1071編でした。内訳は一般の部が52編、学齢児童生徒の部が1019編でした。どの作品にも書こうとする力がみなぎっており、その熱量に圧倒されながら読みました。切り口も、老人問題やコロナ禍、さらには自分自身のいじめの告白など、多方面からのアプローチが多く、新鮮さを感じました。

逆にいえば、人権の問題は、いつ、どこでも生じることであり、それだけに悩ましい一面があります。だからこそ、書くにあたっては、細心の注意が必要とされます。難しいことではありますが、工夫をこらし、わかりやすく、多くの人の心に訴えかける作品となるようチャレンジしていただきたいと思います。

〈最優秀賞〉（一般の部と学齢児童生徒の部を併せた全作品より）

作品名「心に寄り添うということ」

田中 杏実

病気は人を変えてしまうことがあります。本人にとっても、家族にとっても、それはつらい現実です。作者の場合も、大好きなおじいちゃんが脳内出血のため、体にも心にも変調をきたしてしまっています。優しかったおじいちゃんが、別人のように暴言を吐くようになり、家族は混乱します。それでも、周囲の助けを得ながら、少しずつ前進していく姿は感動的です。六か月以上は入院できないシステムのため、おじいちゃんは退院してきます。突然、介護に直面する家族の負担は大きなものとなります。厳しい現実には直面しながらも、家に帰ったおじいちゃんが元の姿にもどっていく姿に、家族のあり方を教えてもらったような気がします。高齢化社会の中で生きていくヒントがちり

ばめられた作品でした。

〈優秀賞〉（一般の部作品より）

作品名「心のバリアフリー」 細川 佳織

脳梗塞を患った父を思いやる作者の悲しみが伝わってくる作品です。朝食の最中に、急に倒れた父。それから始まる入院生活が、きめ細かく描かれています。退院してからも車椅子での生活が続きます。

家をバリアフリーに改造し、新しい毎日を始めようと必死に努力するものの、介護する母には限界があります。外に出ると、家族は厳しい現実打ちのめされます。バリアフリーになっていないところも多いからです。さらには、邪魔物扱いされ、舌打ちまでされたりもします。誰もが経験するかもしれないのに、なってみるまではわからない気持ちだが、正直に表現されています。

〈優秀賞〉（学齢児童生徒の部作品より）

作品名「物忘れ」 笠原 世莉奈

ひ孫の目から、90才になるひいおばあちゃんとおばあちゃんの暮らしを描いた作品です。

いわゆる老々介護の物語であり、そこには難しい現実が繰り広げられます。

軽い認知症をわずらうひいおばあちゃんとの生活は過酷です。物がなくなると、家族が泥棒扱いされたりします。それでも、作者は絶望することなく、何とかしてその状態を理解しようとしています。これから先、もっと大変なことが待っているのかもしれない。

けれども、「ひいおばあちゃんは、今、一番幸せだそうです」の言葉に救いを感じるのは私だけではないでしょう。

〈佳作〉（一般の部と学齢児童生徒の部を併せた全作品より）

作品名「蓮の花日記」 鍋島 えり

日本語教師として働く作者の毎日が描かれています。深く考えて始めたのではなく、田舎での職探しに困り、持つていた資格を活用しようとしただけでした。生徒はベトナム人の技能実習生です。しかし、初日から作者は困難にぶちあたります。生徒達は時間を守らず、テストでもカンニングを繰り返します。いっそ辞めてしまおうと思った作者を引き留めたのは、野外活動を必死にやる彼らの姿でした。

訓練のためと思い始めた日記が、先生と生徒をつなぐ絆となります。まだ上手とはいえない日本語で書かれた日記にひきつけられました。彼らが蓮の花を見るシーンも秀逸です。

作品名「我が姉に想いは深く」 塚口 佳子

冒頭から引き込まれる作品です。日常のふとした瞬間に、作者を襲った胸騒ぎ。それは気のせいではありませんでした。いつも電話で連絡を取り合っていた姉と連絡がつかなくなったのです。夜になって、姉が意識を失って倒れ、病院に運ばれたことを知った作者の驚きと悲しみが伝わってきます。

回復を祈りながら、姉のこれまでの人生を振り返らないではいられない優しさが胸に迫ります。コロナ禍のため、お見舞いも許されず、家族にもつらい日々が続きます。しかし、それに負けずに立ち向かう家族の態度にも打たれるものがありました。

妹から姉への祈りに似た思いに、たとえ会えなくても通じ合える不思議な力を感じないではありません。文章も丹精で読み応えがありました。

作品名「しょうにがんのこどもたちのために」 関 音愛

ヘアドネーションに挑んだ作者の記録です。まだ小学校の一年生だというのに、小児癌で苦しむ子供達のために、自分の髪の毛を差し出そうとする心に打たれます。

髪の毛を最初に6こに分けてからはさみで切っていく手順が、書かれていて、実際に経験したものでなければ書くことのできない作品だと感じました。ひらがなの叙述ですが、そこに独特の味わいがあります。

またヘアドネーションに挑戦することですが、そのときの様子も作文にしていたいただきたいものです。さらに成長した姿に驚くことになるでしょう。

作品名「おじいちゃんの悩み」 瀧 祐太

腰が悪く、五分以上は立っていることのできないおじいちゃんを思いやる孫の優しさがあふれている作品です。コロナ禍によって、ベンチや休憩するスペースがないため、おじいちゃんの悩みはつきません。一見したところは元氣そうに見えるので、席を譲ってもらうこともできません。

作者は具体的におじいちゃんを助ける方法を考えました。そして、考えるだけではなく実行に移しています。そこに作者の真剣さを感じます。思いは行動に移してこそ、力を発揮するものだからです。



《審査総評》（一般の部と学齡児童生徒の部を含めて）

詩は、小説や随想などに比べて言葉の量はとても少ないので、読んでもらいやすい。しかし、あっさり読み捨てられて、読む人の心に残らない場合も多いのです。

とくに、人権の問題や、命や心にかかわることがテーマになる場合は、みんなが分かっていることを書くだけでは相手の心に響きません。

読む人の心が、詩を読む前と読んだ後でははつきりと違っているような、そんな詩であってほしいと思います。そのためには、頭の中で考えたことよりも、日常生活のなかで体験したこと、自分の身の回りの人を見つめて思いをめぐらすこと。何よりも書く人が心を深く動かされた体験でないと、読む人には伝わらないと思います。

そのような観点から選考しましたが、残念ながら今回は最優秀作に相応しい作品を採ることはできませんでした。

〈優秀賞〉（一般の部作品より）

作品名「今日も」 ひの 朱寢

今年は、周りの人たちに支えられて生きていることや、人の思いやりにふれて心動かされたという内容の詩が多かった。この作品もその一つ。

「ヘルプマーク」は、援助や配慮を必要としていることが外見からは分からない人のために作られたもの。周りの人に配慮を必要としていることを知らせるこのマークを見て、声をかけてくれたり、作者が困っている時には、「温かく見守ってくれる人たちがいる」と感じるという。人の優しさ

や思いやり、そして支え合うことが、心豊かな社会の基本であることを教えてくれる。

〈優秀賞〉(学齡児童生徒の部作品より)

作品名「キャンパス」 近藤 葵

自分の心をキャンパスにたとえ、家族や友だちや近所の人たちなど、日常のかかわりのある人たちをそれぞれ違う色として、そこに描きこむ。大切なのは、それらの色が、「私」がいないと成り立たないものとしてとらえていること。もちろん、その逆に、周りの人たちがいないと「私」の絵はなりたたないと考えていること。

生きることが、ひとりではできないこと。お互いに支え合って生きていること。そして、「私」が生きていることは、同時に周囲の多くの人と関わりながら生きているということ。前向きにみんなとともに生きていこうとする姿勢に共感を覚える。

〈佳作〉(一般の部と学齡児童生徒の部を併せた全作品より)

作品名「ひでおさんと僕」 権 影人

脳性麻痺のひでおさんの介護者である作者は、障害者に対する社会の多くの人たちの眼差しに違和感を覚える。障害者にたいする同情的な思いこみそれ自体は、ある意味では自然な心情だが、そこに障害者との心の仕切りを引いてしまっただけとはいえないかと作者は考えるのである。

介護者としての日常を通して、ひでおさんの自然体の生き方に共感を覚えている作者の素直で優しい情感に心ひかれた。

作品名「人見知り」 森本 歩愛

人見知りという自分の心の弱さをしっかりと自覚して、自分の心を閉じ込めていた殻をやぶって生きていこうとする素直な気持がよく表現できている。

作者のようなひとりのさびしさやかなしさを知っている人は、人の優しさや思いやりの大切さが一番よくわかっている。一歩前に踏み出そうとする作者の気持を応援したくなる。

作品名「私」 岡部 姫愛

なんと言っても希望に満ちあふれた気持が、そのまま力強い、生き生きとした言葉となつてあふれているのがいい。そして、「私は私」という表現。ほかのだれでもないたった一人の私という存在に胸を張っている。

さらに、そういう私が、家族や友だちや先生に支えられているということを忘れていないのがいい。たった一人の自分という生命をいつくしむ姿勢は、とりもなおさず人権意識の原点であることは言うまでもない。

《審査総評》（一般の部と学齢児童生徒の部を含めて）

コロナに戦争、さまざまな天災に人災。こんなに地球がすすんでしまうなど誰も考えなかったかもしれません。しかし、こんな時だからこそ、人が人を信じて明るい未来像を見出さなくてはなりません。児童文学は向日性の文学と言われます。どういう状況であれ、どんな悲惨な事態であれ、子供たちが胸を張って未来へ向かっていける文学でなければならぬと私は思っています。

今回の応募作はそれを見事に表現してくれました。霧に包まれたような大海原で、ポツと灯った灯台のように、私たちに勇氣と自信を思い出させてくれました。特に最優秀賞の「ふれる」は、自分自身の苦しみを乗り越えて、人のために役に立ちたいという思いが根底に流れている秀作でした。自分は一人ではない、と思うところからつながっていく社会こそ、本当の未来です。暗いばかりの今こそ、とびつきり明るい童話が必要とされています。来年は、たくさんの応募がありますように。

〈最優秀賞〉（一般の部と学齢児童生徒の部を併せた全作品より）

作品名「ふれる」 パク ヘレナ

父親の転勤で引越してきた奈々は、なかなかクラスになじめないでいました。その上、コロナのせいで学級閉鎖になってしまい、友だちができないまま眠れない日が続き、ひとり苦しんでいました。ある日訪れた保健室で、先生からアロママッサージを受けます。アロママッサージは、ハーブを原料にしたオイルで緊張を解いて心をほぐす効果があります。その効果に興味を持った奈々は母親と共に、「アロマセラピーボランティア講座」を受けることにします。後日訪問した介護施設で、お年寄りの温かい手と心に、奈々自身が癒されていきました。手当て、という言葉は手と手を触れ

てその温もりで癒すという意味でもありません。

コロナ下では、日常が壊れて心の病に陥ってしまった人がたくさんいます。人は人を救うという言葉がありますが、勇気を持って飛び出した主人公が手にしたものは、人の温もりと失くしかけた自信だったのでしょうか。暗い時代に勇気をもたらえた作品でした。

〈優秀賞〉（一般の部作品より）

作品名「よい子の似顔絵」 松末 真理子

どうぶつ村の学校では、いじめっ子のきつね君に皆が手を焼いていました。誰にでも分け隔てなく接するくま先生が、良いことをした子に似顔絵を書いてあげる約束をします。先生の似顔絵はとも上手で、みんなは大喜びでしたが、ずるいきつねくんは毎月の「良いこと週間」の間だけ良い子のふりをして、それ以外はいかかわらず悪い子でした。でも、先生はそれを承知で、毎月きつね君の似顔絵を描いてやります。クラスの皆は不満でしたが先生は、一週間だけでも良い子になっているきつね君を責めません。ある日、先生は急に学校をやめることになってしまいました。その日から、きつね君がそっとゴミ拾いをしていることにクラスの皆は気づきます。「くま先生がどこかで見てくれているような気がして」というきつね君。それこそがくま先生の教育だったのでしょう。暴力や押し付けでは教育は出来ない、それが先生の教えです。

毎日のように見聞きするいじめや折檻のニュースにうんざりしていましたが、この作品のような解決方法もあることを教えられた気がします。

〈優秀賞〉（学齡児童生徒の部作品より）

作品名「ぼくはロボット」 船引 里音

博士が作ったロボットのぼくは、ある家庭に派遣されて幼い子供の世話をすることになります。共働きの両親を持つ男の子は、いつも一人ぼっちで、ロボットは張り切って彼の世話をする決心をします。しかしわがままな男の子は、気に入らないとすぐにロボットをたたいたり蹴ったりする日が続く、とうとうロボットは逃げ出してしまいます。博士の元に戻ったロボットに、博士はありのままを両親に話すように言います。男の子は不満があつたのかもしれないが、本当は感謝しているかもしれないこと。両親はロボットを頼りにしていること。相手の真意を知らないまま、憎しみや恨みを持つのではなく、真実に向き合うことを博士は教えます。博士がいつも自分を見守ってくれているように、ロボットも男の子を見守ろうと決心します。近い将来、各家にロボットがいることが珍しくなくなる時代がくるかもしれません。機械であるロボットと人間が心を通わせることはできるのだという、温かい夢のストーリーでした。

〈佳作〉（一般の部と学齡児童生徒の部を併せた全作品より）

作品名「山の上の王さまと山の下の子王さま」 野村 徹

小さな国の王さまは、いつも山の上のてっぺんのお城から町を見ていました。高いところからは、全部見えるということです。ところが、王子さまはそれでは見えないものがあると思ひ、山の下、町に出て行きます。初めて見る町の人々の暮らしは、思っていたものとは大きく違いました。不満を持つ人々はいさかいが絶えず、自分のことばかり考えているようでした。「何もかも見える」と言っていた王さまは、結局大事なことは何も見ていなかったのです。上から見えないことも、下から見渡せないこともある。見えていないことこそ、大事なことなのだと言います。どちらからも

しつかりと見るのが大事だという事ですね。ブラックユーモアとも受け取れました。

今の日本の政治家に読ませたい作品です。ただ、冒頭と最後の一枚は、蛇足です。書かなくても、読者がきちんと読み取ってくれるように書くのが文学です。

作品名「うーさぎさんとかなかな」 前川 珠紀

ぬいぐるみのうーさぎさんは、大好きなゆみこちゃんが学校の友だちと楽しそうにしているのを見て、寂しくてたまりません。幼い頃はいつも一緒だったのに。それを見たカナカナが、からかってきます。「おまえはもうこの家にはいらぬものなんだ。居ても意味がないんだ」と言われてしまいます。うーさぎさんは心が砕けそうになりますが、ふと気がつきます。そんなことをわざわざ言うカナカナだって、本当は寂しいに違いない、と。その日から、うーさぎさんはカナカナにやさしい言葉をかけるようになります。すると、カナカナの心が変わっていきます。心を開いた二人は友だちになります。やがて別れの日がやってきます。初めて言ってくれたカナカナの「ありがとう」に、うーさぎさんは救われました。小さなお話ですが、大きな意味を感じます。あらためて、「ありがとう」の意味を考えました。

なお、通常応募作品として、幼年向きの作品でも、分かち書きは必要ありません。

作品名「パパマレントル」 山下 治美

面白い発想です。忙しい親に代わって、時間がたっぷりあるご近所さんが、子どもたちと遊んでやるという、今の時代にぴったりのテーマです。ご近所付き合いが難しい時代ですが、こういう温かい交流があれば、いじめや孤立はなくなるかもしれません。思い起こせば、かつてこの国では、それは当たり前のことでした。お醤油が足りなければお隣さんに借りに行き、急な用事が出来れば

ご近所さんが子どもの迎えに行ってくれる。急に雨が降って来たら、帰宅すると洗濯物が取り込んでもあった。それが普通だった時代から遠く、今は他人を見れば悪人と思えとばかりに、ご近所付き合いが希薄になってしまいました。今こそとり戻す時かもしれません。一人で始めたことが、やがて町全体にさざ波のように広がっていく。素敵なことではありませんか。

会話が多くのが少し気になりました。説明よりも描写が大事です。視点を広げて、周りの風景やようすなどを書き込むといいですね。







最  
優  
秀  
賞



あの頃の僕、そして未来の子供たちへ。

○

「明石海峡大橋はなあ、やっぱり西側から見るのが一番ええねんで」

ケンジはベンチに腰掛けながら誰に話すともなく呟いた。僕達二人の目の前に広がる仄かな夕空の中で、大きな橋が静かに浮かんでいる。その上を走る車はミニチュアのように見えた。

「懐かしいね」

同じような言葉を聞いたあの日。あれから

随分と長い年月が経っている。それなのに僕の心は、ロウソクを灯したようにぼんやりと明るく、そして温かくなる。

「東からの景色も綺麗だよ」と僕は笑ってみせた。

「そうかもしれへんけど、なんていうかな……とりあえず大きく見えるんよ。こっちら見ると」

「淡路島からも圧巻だけど」

「いや、そうやねんけど、こっちからが一番ええと思うねなあ。だってさ……」

必死に語るケンジを尻目に、もう一度しっかりと明石海峡大橋を見上げた。正直僕はどこから見てもこの橋は綺麗だと思ったが、先程のケンジの言葉と共に記憶の中で浮かんだ景色は、橋の上からのものだった。

淡路島へ向かうバスの中。

遠足のしおりを持ち、希望に満ちたみんなの表情。

そしてケンジがくれた新しい世界の色。

僕はあの頃の出来事を決して忘れることはない。

○  
子供の頃の僕は一、二年に一回くらいのペースで転校を繰り返していた。もちろん家庭の事情だから仕方なかったことだが、やはり子供ながらに辛い部分があった。小学校へ上がる前に遊んでいたはずの友達は、どこ

の誰なのか今では分からず、顔も思い出せない。小学校も三校にまたがって通ったが、なかなか長い付き合いをするような友達はできなかった。

「怖い……怖いよ……」  
転校のことについて親に泣きついた事は何度だつてある。その度に母と父は「ごめんね」と言ってくれた。それでもその度、心の隙間にむず痒いものを感じるのだった。

ただ、小学生の間は子供同士の心の壁も低く、周りの目に対する意識も過敏ではなかったから、そこまで大きな問題はなく何とかや

り過ごせたと思う。僕が一番辛かったのは中学生の頃だった。

○  
いじめ、ではない。ただ思春期によくある自我意識、自分が内から存在するのではなく周りからの見た目や評価によって存在が決定されているかのような過剰な自意識のもとで僕は無口になった。

転校先で少しの間有名人になるのは慣れていたが、それも数日経てば波はおさまり、いつしか僕はひとりぼっちになる。周りを見渡すと、綿密に形成されたコミュニケーションの輪が嫌でも目に入る。既にあるその輪の中へ入っていく事がどうしてもできなかった。体の中心が震えるほど怖かった。そして中学生の孤独は世界からの孤立だと思えるほど、息の詰まるような寂しさがあった。

「すいません」

一日で喋った言葉がたったこれだけの日もあった。そしてクラスメイトに敬語を使って

しまう自分がなんとなく嫌だった。それを聞いた相手ももどかしそうに丁寧な言葉を使う。

(ごめんなさい……)

心の中でそう呟いて、人との壁を新たに設けているような、悔しい気分になることがしばしばあった。

そんな僕は、最初の中学校で不登校になった。

「今日は俺の家でゲームしよう」

「明日の部活の試合、頑張ろうな」

「知ってた？ あのと二人は付き合ってるんだって」

下校途中の中学生が僕の家の前を通る。様々な声は生き生きとした形をもって僕の部屋に入り込み、耳にまとわりつくように離れなかった。

「学校……来週から行くよ」

そんな力のない嘘を何度両親に告げたこと

か。二人の表情が生み出す機微に触れた僕は自分の言葉が自分自身をも騙していくのだという怖さを知った。

学校へ行けない日々は僕の中で不安と葛藤と、そして時間の流れの無情さを浮き立たせていく。そんな先の見えない暗闇ばかりの毎日ではあったが、再びの転校によってそれは一度途切れることになる。そして僕は新しい学校でケンジと出会った。

「なあなあ、どこから来たん？」

初めての関西だったから言葉の調子がキツく聞こえて、ケンジの第一印象は怖かった。

「千葉から……です」

「へえ、すごいな。関東やん」

何がすごいかわからず、僕は下手な愛想笑いでやり過ごそうと思ったが「なんの部活入るん？ 運動部か、それとも文化部か？」とケンジは矢継ぎ早に質問を重ねる。

「えっと……」

「前は何やとつたん？」

「……………」

僕は学校に通えていなかったことをうまく伝えられない。どうしようかと伏し目がちになりながらもごついていると、「ケンジ！ 体育館でバスケしようぜ！」と廊下から明るい声が聞こえた。

「おう、今行くわー」

両手をメガホンのようにして返事をするケンジを見て、少しだけ『羨ましい』と感じた。そのような感情が自分の中にあることが初めてで不思議だった。

「ユウタも行くか？ 昼休み限定開催、ルー無用のバスケやねんけど」

花を思わせる無邪気な笑顔で、ケンジは僕の名前を呼ぶ。彼を見上げたまま僕の心の中では緊張と少しの歓喜、そして大きな不安が渦を巻き、心臓の音が耳まで伝わってきた。背中と脇に嫌な汗が流れる。僕はゆっくりと目を伏せて小さく首を横に振った。

「そうか、今度よかったら一緒に遊ぼうや。ほんで色々また聞かせてな！」

友達のもとへ去っていくケンジは、短い髪の毛を元気に揺らしながら僕に手を振った。

そして僕も震える手で小さく、それでも確かに手を振った。しかし、すぐに周りの目が気になって手を膝の上に戻した。

(さっき、名前で呼ばれた……)

この時の僕は自分が自分でないような、大きな心の揺れを感じていた。何か心の中で小さな種が蒔かれたのかもしれない。

○

その日の夜のことは、よく覚えている。食事の時に僕が学校での出来事を話し続け、それを嬉しそうに聞いている二人の顔が印象的だった。

「それでね、昼休みにバスケをやってるらしいんだよ」

「あとね、授業中のケンジ君はよく先生に質問するんだけど、いつも面白いんだ」

「部活の話もしてくれただけどね、僕もやってみようかな」

何かに背中を押されているように、次から次へと言葉が出てくる。今までの僕からは想像もできないほど、自分自身のことやクラスメイトのことばかりを話していた。そんな変化を見て母は「友達ができてよかったね」と、微かに光る目を細めた。

「友達……」

僕はその言葉の持つ意味を、中学生になって初めて知ったのかもしれない。いや、初めて知ろうとしたのかもしれない……。

『僕にやっとな友達ができただけかな？』

胸を抱く小さな希望は、心の中の種に栄養を与えていく。知らず知らずのうちに、新しい自分を夢見ている僕がいた。

ふとテレビに視線を移すと、夜のニュース番組が放送されていた。ニュースキャスターが淡々と原稿を読んでいくのを呆然と眺めながら、僕はまるで全てが他人事のように聞き

流していく。

ただ、ある一つのニュースが僕の意識をぐっとテレビの方へ引き寄せた。雨で視界の悪い中、カメラが映すのは電車の線路だった。「今日の午後五時頃、十代とみられる男性が線路内に立ち入り電車にはねられ……」

僕は無意識に耳を塞いだ。

どこか遠くの知らない街。それなのに聞こえてくる踏切の警告音。

カンカン、カンカン。

心臓が共鳴するように高鳴り、僕はゆっくと俯いた。母か父が何かを言ったような気がしたが、まるで何かに取り憑かれたような僕の耳には届くことなく、僕は黙々と、そして単調な動きで残りの料理に手をつけた。

そして、しばらくしてから食事を後にして一人部屋に戻ると長年築いてきた心の中の暗い塊が、すっと僕の頬を撫でた気がした。

『本当に、友達……？……？』

窓の外を見ると暗い夜の中で、星は一つも

見えなかった。その日の空は一段と低かったのだ。

翌朝、久しぶりに感じた身体の怠さと共に『学校へ行きたい』という気持ちと『学校が怖い』という気持ち複雑に絡まりあい、僕は学校を休んだ。

「また、同じだ……」

とても呆気ない一日だった。ケンジは僕のことをどう思っているのだろうか？ そう考えれば考えるほど、後悔が押し寄せてきた。どこにどう転んでも、自分が納得のいく形には落ち着かないようなもどかしさ。それをうまく表現できない苦しさ。再び時計の針が戻っていく気がした。

そしてこればかりとなつて、しばらくの間、また学校に行けなくなつてしまったのだ。

○

学校を休み始めてから一週間が経った夜、僕は不思議な夢を見た。

「ユウタは何がしたいん？」

僕にそう聞くのは紛れもなくケンジだった。そつと手を差し伸べてくれるような、柔らかくて温かい声だった。

「したいこと……？ 何でそんなこと聞くの？」

「今度、遠足あるやろ？ ほんでそこで自由行動があるやろ？ そこで何したいんかなあと思つて」

遠足があることは知っていた。来週の週末、淡路島への日帰り遠足。それでも学校を休んでしまった事が原因で、遠足の事前学習などには参加できなかった。

「今更、僕なんか参加しても……」

正直、僕は参加するつもりではなかった。最後の大通りだけ顔を出すような感じがして、どことなく気が引けたのだ。それでもケンジは、僕の目をしっかりと見つめてくる。

「何言つてんの、一緒に行こうや」

「でも、みんながどう思うか心配で」



周りからの目を気にする僕は、また不安が増したように苦しくなった。ケンジは黙ったまま、僕の呼吸に合わせるように背中をさすってくれる。

「そんなの気にせんでええから。自分がしたいようにすればええと思うで」

僕は俯いて、ただ黙っていた。それでも心の中で何かが動き始めようとしているのが分かった。

「俺は、ユウタも一緒に行けたらいいなって思ってるけどね」

そう言って笑顔のまま、ケンジは歩き始めた。僕はまだ決断できずに立ち止まっていたが、遠くなる足音に急かされるように顔を上げた。彼の姿は、まだ見える。僕は懸命に手を伸ばす。なんとかして、彼に届くように。

「待って！」

そして、目が覚めた。全てがパチンと消えたように思えた。それでも僕の中で小さな温かいものが、確に残っていた。

○

ケンジが僕の家を訪ねてきたのは、夢を見た翌日の夕方だった。学校のプリント類を持ってきてくれたのだが、その中に遠足の資料も入っていた。

「久しぶりやな、プリント持ってきたで」

「あ、ありがとう……ございます」

不意に固まる僕の声。かなり緊張していたのだと思う。

「そんなかしこまらんでも、気軽に話してくれてええからね」

「……うん」

うまく言葉が出てこない。それがもどかしかった。

「遠足が近いから、先生に聞いて持ってきてん。俺ら席近いから一緒の班やし」

遠足のしおりには僕の名前がしっかりと記入されている。そして、班ごとの『やりたいことリスト』が大きく空欄になっていた。

「よかったら、自由行動でしたいこととか考

えといて。なんでもしたいこと、していいらしいで。もちろん常識の範囲内でやけど」

彼はおどけて言ってみせた。

僕はゆっくりと頷いた。

「じゃあ、またな」

颯爽と走って帰るケンジの背中では、僕よりも一段と大きく見えた。それを眺めているとふと僕の口から声が出た。

「待って！」

ケンジが立ち止まり、振り返る。僕は自身の行動に驚きながらも後に続く言葉を探して、「これ……あ、ありがとう」と恥ずかしがりながら伝えた。僕なりの精一杯で、顔が火照るのを感じた。

「おう！」と元氣よく合図して、再び走っていくケンジ。

彼は何も聞かなかった。僕がずっと休んでいる理由に関して、気になることがたくさんあったかもしれないのに。もしかしたら、僕の気持ちを考えてくれていたのだろうか。そ

う思うと、ケンジの存在が僕にとって大事な『何か』になっていることに気がついた。

これは、正夢だろうか？ ケンジは僕に、たくさんものを与えてくれる。安らぎ、勇氣、そして友情という不確かでかけがえのない感情。

僕の心が水を与えられたように生き生きと脈打つ。そして、胸に微かな希望を感じながら部屋へと戻った。

○

それから一週間が経った。

学校にはまだ行けていない。もう少し僕には時間が必要だった。

「大丈夫、大丈夫」と自分に言い聞かせ、「またかつての自分に戻ってしまう」と鼓舞してみる。そしていざ玄関まで足を運ぶも、あらゆる方向から憂鬱な風が流れてくる。それを繰り返していた。

だが、いつもの僕ではなかった。

心の中で、ケンジがくれた希望がじっと機

会をうかがっている気がしていた。ゆっくりと蕾が膨らむように、僕の気持ちは着実に前に向きつつあった。だからこそ、毎朝玄関へ向かったのだ。

「なんか少し変わったね」

夕食時に母が僕の顔を見て言った。

「本当に？」

「うん、ちょっとだけ大人になったような、そんな感じ」

「背が伸びたのかな」

それを聞いて母は小さく笑った。

「もちろん、そうかもしれないけど」

その後、母は笑顔のまま何も言わなかった。それでも、その笑顔こそが大事なものののだと思えた。そして、そのように思えたことが嬉しかった。

僕はそれからものんびりとした話をし、テレビを見ながらリビングに落ち着き、しばらくしてから眠くなった目を擦って僕は席を立った。

「もう寝るよ。おやすみ」

僕がそう言うと、母はちらりと僕を見て「おやすみ、ありがとう」と言った。

この『ありがとう』が、心地良かった。全てがうまくいくような気がして、僕も「ありがとう」と照れながら伝えた。

そしてケンジのことを考えた。彼にも一度しつかり感謝を伝えたい、と。

○

遠足の前日、僕は学校へ向かう事ができた。

「いってきます」

「いってらっしゃい」

この簡単なやり取りに、どれだけ感動しただろう。もう心の中の蕾は花を咲かせ始めていた。

そして、教室の扉を開ける時の緊張は今でも覚えている。心臓の鼓動が服の上からでも分かるくらいだった。扉に手を伸ばしながら立ち止まっていた僕だったが、またケンジに救われたのだ。

「お、ユウタ！ おはよう」

何も違和感のない挨拶。彼なりの優しさだった。

「おはよう」

彼と共に教室へ入る。

自分からクラスメイト達の顔を見れなかったのに、みんなが声をかけてくれた。

「久しぶり！」

「今日の給食はカレーやで。ユウタくんカレー好き？」

「明日の遠足は何持つてく？」

僕のいない間に、みんながどんな話をしていたのか分からない。それでも僕が見たものは愛情だった。優しい愛のある声だった。僕はそれを受け止めることができた。みんなが寄り添ってくれていたから。

「みんな、ありがとう」

僕はみんなの前で涙を流した。ケンジはずっと微笑みながら、僕の背中をさすってくれた。

○

あれから十二年経った今、淡路島への遠足を思い出しながらケンジと二人で笑いあっている。

「そんなこともあったなあ」

僕達は、ずっとこのまま友達なのだ。かけがえない時を共に過ごしてきた。

「最近は何忙しい？」

「まあね、でも僕が一生かけてやっていくことだから」

僕は大学を卒業して教師になった。

子供が抱える様々な問題は、周りから見えづらい。僕のような不登校になっている生徒も、そうでない生徒も、悩みを抱えている子どもは多くいる。

「子ども達、元気？」

「そうだね、大人よりは元気そうに見えるけど……どうなんだろう？」

僕もずっと暗いところで一人悩んでいた。誰にも気づかれず、そしてその苦しさをぶつ

けることもできない。

それでも、僕は心に種を蒔いてくれた人がいる。

「そっか……けどユウタなら良い先生になれそうや」ケンジが優しく微笑んだ。

「そうなれるように、日々精進するよ」

次は僕が種を蒔く番なのだ。子供達を取り巻く見えづらい問題を解消する。僕はこれを一生をかけてやっていきたい。

「いつか、優しさの輪ができるまで……」

「え？　なんか言った？」

「いや、ひとりごと」

そう、ケンジがくれた大切な経験が、未来に繋がりますように……。

「ケンジ、ありがとう」

「なんやそれ」

ふふっと、ケンジは笑った。



《最優秀賞》

## 随想部門

心に寄り添うことについて

田中 杏実

私のおじいちゃんは、私が小学二年生の時に、仕事中に脳内出血で倒れ、その後救急車で病院に運ばれましたが、右半身に麻痺が残ってしまいました。元々無口だけど優しくかったおじいちゃんは、自分の体が思い通りに動かなくなってしまうことにショックを受け、自分の気持ちをうまく伝えることができなくなりました。そして、入院中、私たち家族にも、リハビリをしてくださる理学療法士の方にも、暴言を吐くようになりました。優しかったおじいちゃんの変わり果て

た姿に、私も他の家族もかける言葉が見つかりませんでした。本当はおじいちゃんを優しい言葉で根気よく励ましてあげたらよかったです。その時の私はどう接していいか分からず、ただ見守ることしかできませんでした。

そんなおじいちゃんが退院する日が来ました。快復したからではなく、6か月以上入院することができないという決まりがあるからです。当時のおじいちゃんの病状は、自分の力ではベッドから起き上がることもできず、歩くことも着替えをすることもできない状態でした。おばあちゃんもお父さんもお母さんも不安そうでした。誰も介護の経験がなく、その上おじいちゃんが乱暴になっていたからです。ところが、私たちの不安はすぐに払拭されました。入院中は険しい表情で、話しかけるのも怖かったおじいちゃんの表情が、みるみる今までの優しくして穏やかな表情に戻ったのです。その時は気付かなかったけれど、

今思うとおじいちゃんは、

「こんなところ（病院）にいつまでいたって良くならないんだから、早く家に帰らせて欲しい」

と訴えていたのかもしれませんが。

体は麻痺しているけれど心はみんなと同じで生きているんだと、当たり前のことですが、入院中の無表情のおじいちゃんを見て、心まで麻痺していると勘違いしてしまいました。その時、入院中のおじいちゃんがいくら暴言を吐いても丁寧に接してくださる職員の方たちのことを思い出しました。おじいちゃんが心を閉ざして、返事をしなくても、毎日明るく優しく声掛けを続けてくださいました。その方たちは、おじいちゃんの心を大切に、接し方に気を配ってくださっていたんだと気づきました。

二〇二〇年、神戸にある病院で、精神疾患のある患者が、看護師らから虐待や暴行を受けていたことをニュースで知りました。これ

は完全に人権を無視した卑劣な行為です。なぜそんな酷いことを平気でできるんだろう、と不思議で仕方ありません。報道によると、虐待は施設で常態化しており、先輩から虐待するように命令されたり、虐待を断ると職場内でいじめにあたりたそうです。自分を守るために、罪のない人に嫌がらせをするなんて、私なら耐えられなくなって、職場を変えたいと思います。しかし、人間は弱い心を持った生き物でもあります。日常生活の中で相手の気持ちを考えずに行動してしまうことが私にもあります。困っている人がいて、私がかけてあげたら解決するかもしれない場面で、緊張や何と言っていいか分からないとき、声をかけられないことがあります。でも、そんな時はどんな言葉でもいいから、そばにいるよということが相手に伝わればいいのだと思うようになりました。

おじいちゃんは五年前に亡くなりました。最後までリハビリには消極的で、食べることに

だけが楽しみのようでした。元々無口で、私たち孫のことを、優しい眼差しで見守ってくれるおじいちゃんだったので、退院後何を話していいか分からず、あまり話さなかったことを後悔しています。何を話していいかではなく、何でもいいから話しておけば良かったんだと気付きました。今なら

「スイカ美味しいね。今日はデイサービスでどんなことをしたの？」

と、何でもない日常の会話ができたと思います。もっと極端な話、おじいちゃんと同じように、優しい眼差しでおじいちゃんのことを見守るだけでも、おじいちゃんの力になれたかも知れないと思います。そのことに気付かせてくれたおじいちゃん、本当にありがとうございます。私はいつも仏壇で手を合わせる時、そう思っています。すると、おじいちゃんの遺影がニッコリ微笑してくれているような気がします。





《最優秀賞》

## 創作童話部門

ふれる

パク ヘレナ

奈々が、保健室のドアを開いた。

「先生、頭が痛いんです」

村田先生が、おでこに手をあてる。

「熱はないようね。どうしたのかな。思い当たることはある？」

「このごろ、あまり眠れなくて」

「そう。じゃあ、今は眠い？」

先生が、奈々の顔をのぞき込んだ。

「眠いんだけど、頭がキーンとしていて、そんな時は、眠れないんです」

「それは、困ったわねえ。あ、そうだ」

先生が、小さなビンを取り出した。

「これで、マッサージをしてあげる」

ビンのふたを開けると、香りが広がった。

先生が器にオイルを注ぎ、その中に、香りのもとを数てきたらした。そして、オイルを自分の手になじませ、首の後ろをやさしくなでた。

「この香りは好き？ ラベンダーという花よ」

奈々は目をつぶり、香りを吸い込んだ。頭のきんちようが、少しずつとけていく。

次に、先生は、奈々の手を両手で包み込んだ。先生の手のぬくもりが、奈々の体にしみ込んでいく。奈々のまぶたが、だんだん重たくなってきた。

「今なら眠れるはずよ。さあ、ベッドに横になって」

奈々は、深い眠りについた。目が覚めると、夕方になっていた。

「頭痛はとれたかしら？」

奈々の頭が、軽くなっていた。

「はい、先生。ありがとうございます」

「よければ、眠れなかった理由を、教えてくださいませんか？」

奈々は、自分のことを話した。父親の転勤で、引越をしたこと。コロナがもういなくなるなか、この学校に転校し、すぐに学級閉鎖になったこと。それで、友達を作るチャンス逃してしまったこと。

「給食のあいだも、おしゃべりしてはいけないでしょ。遠足も中止になったし。一人ぼっちでいると、胸が苦しくなって、ドキドキするんです。私、いつか友達が出来るのかなあ、って。そんなことを考えていると、夜に眠れなくなるんです。それで、朝起きると、頭が重くて痛いんです」

頭が痛い、クラスメートがせっかく話しかけてきても、ちゃんと返事ができない。

「そうだったの。辛かったわね」

村田先生が、背中をやさしくなでた。ラン

ドセルを背負った奈々に、村田先生が声をかけた。

「よかったら、また来てちょうだい。マッサージをしてあげるから」

家に帰ってお母さんに話をすると、お母さんが抱きしめてくれた。

「私も、マッサージを習おうかな。そうしたら、奈々にしてあげられるでしょ」

村田先生に伝えると、チラシをくれた。「アロマテラピー・ボランテイア講座」と書いてあった。お母さんが、すぐにグループに連絡を取った。

「いっしょに行ってみない？」

お母さんにさそわれて、奈々も参加することにした。

グループの人たちが、二人を迎えてくれた。

「仲間が増えてうれしいわ。では、さっそく始めましょう」

代表の美紀さんが、説明を始めた。

アロマテラピーでは、草や花の成分を集め

たエッセンシャルオイルを、心や体の健康のために使う。エッセンシャルオイルには、いろいろな種類があつて、元気な気持ちにしてくれるものもあれば、リラククスさせてくれるものもある。保健室の村田先生が使つたラベンダーは、リラククス効果がある。

ハンドマッサージをするには、エッセンシャルオイルを、植物からとつたオイルでうすめる。それを手の平にとつて、相手の手を両手で包み込む。そうして、オイルを手の平や甲に伸ばし、ひじのあたりまでゆつくりとなでていく。

奈々とお母さんは、先輩のメンバーがマッサージをしてくれる間、やさしい手の動きに見入っていた。息を吸い込む度に、ラベンダーの香りが心に届く。メンバーの手は温かくて、心がだんだんほぐれていく。気がつくと、奈々はゆつくりと深く呼吸をしていた。

今度は、奈々とお母さんが練習をする番だ。周りのアドバイスを受けながら、メンバーの

手をそつとなでた。

「その調子、その調子。うまい、うまい。じゃあ、次の会は、指のマッサージを練習しましょうね」

それからは、毎晩、二人でマッサージをやり合うようになった。おかげで、奈々は、だんだん眠れるようになっていった。すっかり眠れるようになると、頭もすっきりし、クラスの人たちとも、少しづつ話ができるようになった。

二人は、熱心にボランテニア講座に通つた。会を重ねるごとに、奈々とお母さんはハンドマッサージが上手になった。

「今はコロナが落ち着いているから、ボランテニアに行きましよう」

週末、メンバーで介護施設を訪問した。グループで手分けをして、おじいさんやおばあさんにハンドマッサージをする。

「こんにちは」

奈々が、おばあさんにあいさつをした。

「あら、かわいらしい。今日はよろしくお願  
いします。楽しみにしていたのよ」

おばあさんが、手を差し出した。奈々はき  
んちょうして、手がふるえた。オイルのボト  
ルを取ろうとして手をのばしたら、指先が当  
たり、ボトルがたおれてしまった。オイルが  
テーブルの上にこぼれて広がった。

「あっ！」

施設のスタッフが、あわててタオルでテ  
ブルをふいた。ボトルのオイルは、ほとんど  
残っていない。奈々は、その場に立ちつくし  
た。

「だいじょうぶ。予備のオイルを持って来て  
いるから、すぐに用意するわね。気にしない、  
気にしない」

美紀さんが、明るく声をかけてくれた。で  
も、奈々の頭の中は、真っ白になってしまっ  
た。動こうとしても、体が動かない。

突然、おばあさんが、奈々の手をにぎった。  
奈々は、びっくりして顔を上げた。

「私にもね、あなたぐらいの孫がいるのよ。  
でも、なかなか会えなくてねえ。勉強が忙し  
いし、バスケットボールチームで活躍してい  
るし。おまけにコロナでしょ」

おばあさんが、いとおしそうに奈々の手を  
さすった。

「こうしていると、なんだか心が落ち着くわ。  
アロマのオイルは、なくてもだいじょうぶ。  
年をとると、子どもに帰るのかしらね。施設  
で暮らしていると、心細くなる時があるのよ。  
そんな時、だれかの手をぎゅつとにぎりたく  
なるの」

おばあさんは、奈々の手をしばらくさすっ  
ていた。おばあさんの手のぬくもりが、奈々  
に伝わってくる。奈々の心と体のこわばり  
が、だんだんとほぐれていく。

「おばあさん、ありがとう。私、もうだいじょ  
うぶ。今度は、私がおばあさんをマッサージ  
する番よ」

美紀さんが、予備のボトルを奈々に渡した。

奈々がオイルを手に取り、おばあさんの手に両手をそえた。たくさんの経験がぎざみこまれたおばあさんの手に、若くてしなやかな奈々の手が重なる。奈々は、心を込めてハンドマッサージをした。

美紀さんが用意してくれていたのは、ラベンダーとスイートオレンジを混ぜたものだった。スイートオレンジは、リラックス効果があるが、心に元気にしてくれる。ラベンダーとスイートオレンジの香りが、おばあさんと奈々を包みこむ。

「ああ、いい気持ち」  
目をつぶりながら、おばあさんがつぶやいた。

「私も」  
オイルの効果なのか、やさしい気持ちの魔法なのか、マッサージは、奈々の心もいやしていた。

マッサージが終わると、おばあさんがそでを直しながら、奈々に言った。

「おかげで、すてきな気分になったわ。近いうちにまた来てくれる？」

おばあさんは、やさしい目をしていて。

「はい、もちろん！」

お母さんが親指を立てて、グーサインをした。美紀さんが、がんばったね、と肩をたたいてくれた。

コロナで心細い思いをしていたのは、私だけじゃなかったんだ。そう気づくと、しょんぼりとしているのがもつたいなく思えてきた。ボランティアに行つたはずの奈々が、反対に勇気をもらつた。

夏休みに入るまでに、もっといろんな人と話してみよう。

外に出ると太陽の光がまぶしく降り注ぎ、奈々は思わず目を閉じた。

夏はもうそこまで来ている。





優  
秀  
賞

《優秀賞・一般の部》

## 小説部門

シマトネリコの木と僕

先間 美保子

僕は、リビングの椅子に座り庭にそびえる一本の木を見上げていた。

その木は初夏の日差しを浴びながら、緩やかに吹く風に身をまかせ、心地よさそうに踊っているかのように見えた。そして自らの緑の葉っぱ達をサワサワとならし、その優しい音を僕に聞かせてくれていたのだった。「この木の名前はなんていうんだろう？ この木は、いったい、いつからここにあったんだろう？」

僕は漠然と湧いてきた疑問を口にした。

「この木はね、シマトネリコって言う名前の木なの。あなたが病気を発症した頃に、どこからともなくやってきて、ここに根づいたのよ。お母さんも、この木がこんなに大きくなるなんて思いもしなかったわ。あなたも、ここまでよく頑張ったね。」

僕の疑問に、いつの間にか僕の傍らに来ていた母が、そうつぶやいて僕の肩にそっと手を置いた。

「今まで……」

僕は、母の言う、その今までを振り返ってみた。

それは二年半前、友人の言葉から始まった。

「お前、一度、病院で見てもらいなよ」

「病院？　なんで？」

僕は、友人の言葉に納得がいかない。

「お前、おかしなこと言っているんだって。」

ご両親に言っただけで診察内科に行きなよ」

彼の続けて言う言葉に、何故、僕が病院で診てもらわなきゃならないんだ？　しかも心



療内科だなんて。そう憤りさえ感じていた。

事の発端はこうだ。僕の中で、いつの頃から僕に語りかけてくる声があった。

本当にいつの間かだ。ごく自然に。それは頭の中で？ いや違う。すぐ横に人がいるかのごとく。それはごく当たり前の事のように僕の中で起こっていた。

そう、それは僕にとつたらなんの違和感もない事だった。

その声は、僕にいろんな事を話しかけてくる。

目には見えないが確かに話かけてくる。それは一人ではなく、何人も人の声。男性の時もあれば女性の時も。

その声の主達は就職したての僕に色々な事を教えてもくれたものだった。

例えば、その会社の業務のことだったり、会社の人々の人間関係だったり。

僕にとってはその声達に助けられたといっても過言ではなかった。

そんな声はこうも言った。

「この会社よくない会社だ。辞めたほうがいい。君の為にはならない」

だから僕は会社も辞めたんだ。その声達が僕を助けてくれると信じていたから。

両親には会社が合わないというソソについて辞めた。

それから変化が起こった。聞こえて来る声だけでなく、何者かが僕を見張っている感覚が起き始めてきた。

僕は全ての人に知られていて、僕の情報を集めたサイトがあり、僕は、常に誰かに見張られている、そんな感覚に囚われて行った。

僕は、僕の事を集めたサイトがあると信じて、それを必死になって探す。だが一向に見つからない。

だから、だからなのだ。友人に頼んでその僕の事を言っているサイトを探して欲しいと頼んだのだ。

「そんなサイトなんかある訳がない。探し

たつて見つかるとはならない」

そう言つて友人に否定された。でも納得のいかない僕は、付け加えてこうも言つた。

「君にだから言うよ。僕は不思議な力を持つ者なのだから、僕を監視しているサイトも絶対にあるはず」

そして不思議な能力を持つ僕だからこそ、目には見えない、沢山の人の声も聞こえるんだ。そう友人に告げた。

聞いていた友人は呆れた顔をし、僕の目を見て病院に行つたほうがいい。君の両親に相談して、心療内科を探してもらつたほうがいい。そう僕に言つた。

僕の事を全く理解してくれない友人から、母に連絡が行つたのだろう。

次の日、母から言われた言葉は、

「行こう心療内科」

僕は、あの頃、家では全然喋らなくなつていたし、会社を辞めて以来、家から出ず、引きこもり状態になつていた。

母は心配していたに違いない。そんな矢先に友人から、病院に行つたほうがいいだなんて連絡が入つたのなら、なおのこと心配が増したはずだ。

「今から行きましょう。病院」

母は今にも泣きだしそうな顔をしていた。

「いや違うんだ。会社では色々あつて辞めたけど、僕の事を、見えない人々の声が助けてくれるし、僕は不思議な力を持つているのだから病院なんか行かなくても平気さ大丈夫。そんなことより、今、玄関で、もの音がしたけど、お母さん、あれはきつと僕を偵察に来たヤツらだ。玄関の鍵はきつちりかかつているよなね？」

その時の母の僕を見る目はなにか怯えたような、我が子ではなく、怖い何かを見るような、そんな目だった。

その夜、仕事から帰つて来た父に病院に行かなければ、この家から出て行つてもらつた。などと、なかば脅しとも言える言葉で、僕は

次の日、母に付き添われ、しぶしぶ、駅近の心療内科に行った。

その時は、もうすぐ冬に近づこうとしていた時期で、落ち着いた雰囲気の待合室には若干、ゆるい暖房がかかっていた。

僕の周りに座っている人々は思いのほか大人しい。

周りの様子を見ながら待合室で待っていると、ほどなくして診察室から僕の名前が呼ばれた。

診察室では、僕の目の前に座っている痩せた白髪の先生が、僕や母の話をゆっくりと、時間をかけて聞いてくれた。

そして僕や、僕の母の話をカルテに書き綴りながら確信を得たように

「統合失調症です」

先生は僕らにそう告げた。

統合失調症という聞いたこともない病名、隣で聞いていた母は戸惑いを隠せない様子だった。

「せ、先生、息子は治るんですか？」

不安そうな母の質問に先生は

「よくなりますよ」その一言だった。

その一言ではあったが、母は安心した様子を見せた。

ただ、ここから、僕と、僕の両親、僕が巻き込んでしまった友人と、この病気との闘いが始まった。

壮絶な病気との闘いなどこの時は想像もしていなかったのだ。

先生の言った、よくなります。という言葉がすぐよくなると信じたかったのに期待はことごとく裏切られる事になって行った。

心療内科に行ったその日から、言われた薬を飲み始めるも、薬の副作用なのか、病気から来る症状なのか、唇が硬直したり、洗面所で顔を洗っていても足踏みが止まらなかったり、自分の意志とは全く違う動きがいろんな場面で出てくるのだ。

部屋でくつろぎたくても落ち着けず、自分の部屋と隣のリビングを行ったり来たり、顔を下に向けたまま、何十往復もそれを繰り返す日々が続く。

そして何にも集中することが出来なくなり、テレビも見れないし、本も読めない。

食事にいたっては、何をどれだけ食べていいのかさえ分からなくなっていた。

食べても、食べてもまだ足りてないのではないかとという恐怖から炊飯器のご飯を全部、平らげようとして母に止められた事もあった。

病気がわかって治療を始めた頃の僕の目はなにかに怯えたような、ぎらつくような、本来の僕の目ではなかったと、あとで母に聞いた事がある。

それほど治療を開始した当時は、以前の僕ではなく、僕という人間が違ふ誰かに変わって行く感じだった。

そんな状態で仕事も出来るはずもなく、半

年くらいは家の中だけの生活が続いた。

日々繰り返される僕の異様な行動や言動を見て、母が泣いている姿を何度も目の当たりにした。

「あなた、この子は私が引き取って面倒を見るから、あなたは自由になっていいのよ。私達、夫婦、別れて暮らしましょう」

母は、こんな僕の姿を父には見せたくなかったのだろう。そして先行き見えない病気との闘いに母親として責任を果たす覚悟で父に

「別れよう」そう涙ながらに言った。

「なにを言っているんだ。先生は、よくなると言ってくれたのだから？ 時間がかかっても治療を続けていけばいいんだよ。僕らは見守って行くしかないんだ。家族で一緒に頑張るって行こう」父は、母を慰めるように優しく言った。

そんな父の言葉に安堵したのか母の目から再び涙が溢れていた。

僕は、そんな両親を見て、ただ、ただ申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

大学の仲間たちは皆ちゃんと就職もし、社会人として働いている。

それに比べ僕は、こんな状態で親まで泣かせ、夫婦の危機までおこし、なんの生産性もない。

僕は、いったいなにをやっているんだ。腹立たしさと同時に、こんな僕が生きている意味があるのだろうか？ そんな疑念さえ湧き上がって来た。

ただ僕がなりたくてこうなっている訳ではない。病気のせいでも何も出来なくなり、自分の意志ではない言動や行動、思考が出て来ているんだ。

僕は悔しくて口唇をかみしめた。

「ごめん。泣いたりして母さんが悪かった。治療、始まったばかりなんでもんね。家族でゆっくりと治療して行こう」

口唇をかみしめた僕を見て、母は自分の流

れ出る涙を拭きながら僕にごめんと言った。

僕が生まれた時、僕は、元氣な男の子だったと聞いていた。今まで何の病気もなく育って来た。

それがある時から病気を発症し、知らず知らずのうちに、僕にしか聞こえない声とだけ会話し、引きこもり、そして病気の中にどんどん入り込んだんだ。

そんな病気から治療を開始した当時は、普通に生活してきた当たり前の生活がものに見事にぶち壊され、もう、もとの生活に戻れない。そんな絶望的感覚だった。

きっと母もそう思ったにちがいない。今まで普通に育てて来た、我が子が病気によって得体のしれないものになっちゃった。そして僕が思ったように、もう、もとの普通の生活には戻れないと。

母の流した涙は、自分の息子は、もうもとの息子には戻れない。そんな絶望の涙だったにちがいない。

ただ幸いな事にそんな僕でも、母を始め、父や、僕の友人、僕に寄り添ってくれる人々がいてくれた。

仕事にも行けず病気からくる様々な症状と葛藤する中、スマホだけは、肌身離さず持っていた。辛い思いを友人に愚痴る。

自分の意志ではないのに地団駄を踏む、服の匂いが気になって何度も何度も匂いを嗅いだり、風呂に入ろうものなら体の汚れが落ちてない又何回も何回も体を洗う。風呂から上がるころには、ゆうに二時間を費やしてた。時にはまた何かが声になって聞こえ、これは病気ではなく霊的なものではないか？

いろんな症状に不安がつもの。

そんな毎日の不安や、やるせなさが愚痴となって友人にラインで聞いてもらっていた。

今でこそ思う、友人は仕事をしている。僕の愚痴はそんな彼の仕事の時間も関係なくグダグダ言い放たれる。仕事中にそんなグダグダのラインがきたら友達を終わりにしたいと

思うだろう。

それでも彼は友達の間係を終わりにはずせず僕の病気と、とことん付き合ってくれた。

半年が経った頃、症状も、ほんの少し落ち着いていた僕は、母の勧めで、とある生活支援所に電車で通う事にした。

僕も少しでも前の僕に。そして前の元の生活に戻りたかったからだ。

だが通い始めて間もないころ、朝に飲んだコーヒートの濃さが気になりだす。たぶん、普通の人に言っても理解できない事だろう。

濃いコーヒートを飲んだ事によって体の中の栄養バランスが崩れ、体調が悪くなるのではないか？ そんな不安が黒い闇のように僕の中に襲いかかる。

そのころ足踏みも症状は、ほとんどなくなっていたにも関わらず、不安を感じたせいで電車の座席に座った瞬間に足踏みをしたです。足踏みだけにとどまらず座席で立った

り、座つたりを繰り返す。

僕の前に座っていた親子連れの母親のほうが、僕のそんな様子を見て、慌てて自分の子供の手を引き、隣の車両に移って行こうとした。

その親子連れの母親はまるで僕の事を怖い者をみるかのような怯えた目をして、必死で我が子を守ろうとしているようだった。

お願いだからそんな目で僕を見ないで。僕は、何も悪い事はしないし、怖い人間ではない。何故そんな目で僕を見て、逃げようとするんだ。僕のほうが不安という黒い闇に包まれそうになって、怖い思いをしているんだ。お願いだから、誰か、僕を助けて。

僕の心の叫び声が、僕の心の中で、こだまになって響き渡る。

けれども、そんな僕の悲鳴にも似た叫び声は僕の中で空回りするだけで、電車の中の誰にも聞こえはしない。

でも、その時だった。

「ねえ、ママ、あのお兄ちゃん、あの絵と同じだよ」

「な、なに？　かなちゃん、何を言ってるの？　早く、違う車両に移ろう」

母親に引かれた手を払いのけながら小さな女の子が

「ほら、あそこの絵と一緒にだつてば」

そう言つて女の子の小さな指が電車に吊られていた中吊り広告を指さした。

不思議な事にその女の子の指さした方を見た母親は、再び娘の手を強引に引こうとしていた手を緩め、他の車両に移る事もなく女の子と一緒に同じ座席に座り直した。

今まで僕の事をなにか怖いものを見るかのように怯えていたその母親の目が今度は申し訳なさそうに、そして優しい眼差しに変わっていたのだった。

何が起きたのか、その時の僕にはまったくわからなかった。

ただ何か、母親の恐怖を消し去ったものが

そこにあつたのは確かだつた。

その日の僕はそこにあつた、それを確認する余裕さえなかつた。それだけ、その日は、本当に苦しい一日だつた。コーヒーの濃さでこんなにも苦しい思いをするなんて以前の僕なら考えもしなかつただろう。こんな思いは誰も理解はできないだろう。

ある時は、電車の中で靴の紐の長さが気になりだし、電車の中でソワソワしだした。靴紐を直そうと一度外してみたものうまく結べない。ぐしゃぐしゃになつた紐が更に気になる。不穩になりソワソワとする体の動きがとめられない。

「もう無理だ」

僕は向かつていた生活支援所には行けず途中で電車を降り、自分の家に逃げるように帰つた。

必死で帰りついた家には母はおらず、たまたま仕事が休みだつた父が玄関を開けてくれた。

「生活支援はどうした？ 行つたんじゃなかつたのか？」

「く、くつ、靴紐の長さが気になつて、電車の中にいれなくなつて途中で降りて帰つてきた。お父さん、僕、この靴紐が結べなくて」  
何をどう伝えていいのかわからない。悔しくて、悲しくて、涙がどこからともなく溢れ出た。よくわからない感情から来る、その涙は下を向いた僕の顔から、ぐしゃぐしゃに絡まつた靴紐の上に何粒も何粒も流れ落ちた。  
「そうか。そうだったんだな。そんな日もあつて。明日には気持ちも落ち着くから大丈夫」

そう言いながら父は、僕の頭を優しくなでて、ほどけた靴紐を結び直してくれた。

僕の靴紐を結び直してくれてる父の頭には沢山の白髪があつた。

父は、どんな思いでこんなふうになつた僕を見ているんだろう。

靴の紐さえ結べなくなつてしまつた息子を



見て辛くないはずがない。

「ごめんなさい。お父さん」

僕は泣きながら父に謝った。

「なにも謝らなくてもいい。少しずつよくなればいいんだから」

その言葉に父の優しさの全てがあつた。

そして、あれから二年近く時が流れた。

いろんな症状は少しずつ改善され今ではほんの少しではあるが集中力も戻ってきている。

まだまだ仕事には行ける状態ではないし、心から、何かを楽しめる状態でもない。時によつては、何か気になり出したら不安になったりという症状も、多々あるが、しかし、よくなってきているのは確かだ。

そんなある日、僕はいつものように電車に乗る生活支援所に向かつていた。

電車の中であの日の事をふと思い出した。

そう、僕がコーヒーの濃さが気になり不安に押しつぶされそうになったあの日。

子ども連れの親子が僕の事を避けるように

隣の車両に移ろうとしたあの時、小さな女の子が母親の手を払いのけ、中吊りを指さして言った。

「あのお兄ちゃん、あの絵と一緒にだ」

僕は、その時と同じ車両の同じ席に乗っていた。

僕は確かめるようにあの時、女の子が指さした中刷りの方に目をやった。そこに描かれていた絵、それはソワソワする人。

うろろろする人。

大きな声を出す人。

どこか一点を見つめる人。

いずれも電車の中でのあの日の、僕のように戸惑う人々の絵だった。

そしてその絵の上に書かれてあつたのは

「これらの行動は障害からくる色々な行動。私たちのことを知ってください。」

そうと書かれていたのだった。

あの時、僕は心の中で必死に叫んだ。

「そんな目で僕を見ないで。って。好きでこんなふうになつてゐるんじゃない。って。そして誰か僕を助けて。って」

悲痛な叫びと一緒に助けて欲しいと、心の中で何度も何度も叫んだ。

僕は落ち着いた状態になつた今、その絵を見て、僕のあの時の悲鳴にも似たあの声が、この絵を通してあの小さな女の子に、そしてあの母親に伝えられたのだとわかつた。

そして何より僕と同じように声にならない苦しみを持ち、叫んでいる人々がこの絵のように、この世の中には沢山いる事も知つた。

同じ辛い思いを持つ仲間が沢山いる。僕だけじゃない。それだけで僕は救われた思ひだつた。

「さつきも言つたけど、この木はね、あなたの病気がわかつた頃に何処からともなく飛んできた種がこの庭に根付いて少しずつ大きくなつた木なの」

僕の肩に手を置いた母が続けて言つた。

「この木が、ここまで大きくなるなんて思つてもいなかつたわ」

僕の病気がわかつた時に飛んできた種、そしてその種から、ここに根づいたシマトネリコという名前の木。

雨や風に打たれ、時には焼けるような真夏の日差しも浴びて来ただろう。それでも生きて育つて来た。一生懸命に。

その木の葉先から下をたどつて行けば少しずつ大きくなつたであろう幹があつた。さらにその下には茶褐色をした、こんもり盛られた土がある。

そこにある土は、この木が倒れないようにしっかりと支えてくれるように見える。

そして、この木が枯れないように、空から降ってくる雨だったり、栄養をあたえてくれる太陽の光だったり、沢山の環境がこの木に命を与えたと言つても過言でない。

このシマトネリコの木は色んなものに支え

られ育つて来た。

僕は、この木は僕と同じなんだ。そう思わずにはいられなかった。

空から降る雨は生活支援の人達だったり、太陽は僕の友人だったり、根本の土は僕が倒れないように、しっかりと支えてくれている僕の両親のように思えた。

沢山のいい環境が重なってこの木は大きくなった。

僕もこの木と同じで沢山の人の助けや支えがあつてここまでこれたんだ。

病氣になつた者にしかわからない、苦しみや、悲しみ、そして葛藤。

それがどんなに辛いものなのかは僕らのような当事者にしかわからない。でも支えてくれる人々がいるだけでその辛さや苦しみは少なからず緩和される。

今だからこそ伝えたい。あの病氣を発症し治療を始めた頃の苦しみを抱えていたあの頃の僕に。

本当に良くなるから。その状態はいつまでも続かないから。きつと抜け出せるから。完璧とまではいかないけれども、少しずつ、少しずつ、必ずよくなるから。諦めないで。支えてくれる人々が君のそばにいるから。だから、諦めないで。

「このシマトネリコって言う木はね小さな花をつけるの。いくつもの淡く白い色をした小さな花が重なり合つて、ふわふわと、まるで綿毛のようにも見えるの。ほら、あの一番高いあそこに見えるでしょ？ あれがこのシマトネリコの花なのよ」

そう言つて母はこの木の一番高い所を指差した。

母の指さした所を見ると、なるほど母の言うように葉っぱの先に淡い白い小さな花がいくつも咲いているのだった。母が言うように綿毛のように見える。

「でもね、不思議な事にこのシマトネリコって言う木は、条件によって花を咲かす木と、

咲かさない木があるんですつて。不思議よね。同じ木なのに。花を咲かす木と咲かさない木があるなんて。ここに根付いた木は花を咲かした強い木なのね」

花を咲かす木と、咲かさない木か。

「この先、まだまだ、何があるかわらないけど、頑張つて行こう。お父さんの言うようにゆつくりでいい。焦らなくていいのだから。この木が花を咲かせたように、あなたもきつといつか、自分らしい花を咲かせられることを信じて、前に進んで行くのよ。私達も、あなたがあなたらしく生きて行けるように支えていくから」

母の言うこの木が花を咲かせたように、僕も僕らしく僕の花を咲かす。

それは、まだまだ先の事だろう。咲かせられるのかさえもわからない。

でも、僕は、きつといつか僕の花を咲かせ僕らしく生きてみせる。

僕が病気を発症したときに根づいたこの木

のように、支えてくれる人々のおかげで僕はここまでよくなったのだから。

その人々に喜んでもらえるように、僕も小さくともいい、僕らしい僕の花を咲かせてみよう。

そう僕は、僕の心の中で固く誓った。

シマトネリコの木が心地よい風にふかれ葉先の白く淡い綿毛のような花を揺らしながら「いつか君にもこんな花が咲かせられる日があるさ。そう信じてゆつくり、ゆつくりでいいから、前に進んでいくんだ。だって君は僕で、僕は君だろう」

そう言いながら僕に優しく微笑みかけてくれているようだった。

《優秀賞・学齡児童生徒の部》

## 小説部門

黒猫かあさんと三匹の仔猫

工藤 容子

あるところに、お父さん、お母さん、お兄ちゃん、妹の四大家族が住んでいました。

六月のある晴れた日、庭に大きな黒い猫が来ているのを妹が見つけました。

真つ黄色の目をした体の大きな子です。

動物好きな妹はすぐに声を掛けたかったのですが、驚かせたら逃げてしまうかとも思い直して、こっそりカーテンの隙間からのぞき見て様子を窺うことにしました。

大きな体の黒猫は、しばらく庭に滞在した後フツとどこかへ行ってしまいました。

「あゝあ、残念。行っちゃった」とがっかりしたのですが、翌日また庭に現れたのです。

妹は昨日と同じようにカーテンの隙間から真つ黄色の目の黒猫をひたすら観察しました。

身体の大きなその子は、ゆったりと庭に横たわり昼寝を楽しんだ後、またスツと姿消しました。

こんな日が何日間か続き、ふと妹は「あの子は何しにウチの庭に来るのだろう？」と不思議に思うようになりました。

そのうちに、お父さんやお母さん、お兄ちゃんも庭にやってくる黒猫のことに気付き、皆楽しみにその姿を待つようになりました。

そして同じように「あの子は何しにウチの庭に来るんだろう？」と思っていたのでした。

ある日のこと、どこからか「ミュージュー」というか細い鳴き声が庭から聞こえてきました。

妹は声の主を探しますが見当たりません。

お母さんに話して一緒に探してもらいましたが、やはり見つかりません。

「おかしいわね。どこからきこえてくるのかしら？」と二人で首をかしげていると、庭のすみっこの衣装ケースが目に入りました。

大掃除をして不要になったリサイクルショップ行き予定のケースです。

見ると少しだけ引き出しが開いているのです。

恐る恐る中を覗いて見ると、そこには小さな黒い毛玉の塊が三つ。産まれたての仔猫でした。

大きな体の黒い猫はお母さん猫で、赤ちゃんを産む場所を探して庭に来ていたのです。

赤ちゃん猫はモゾモゾと動いて小さく泣いています。辺りを見回してもお母さん猫はいません。

お腹を空かせて鳴いている仔猫をほっておかず、妹は手を差し伸べて抱っこしようと思いました。お母さんがそれを止めました。

「野良猫のお母さんが抱っこしているのを見たら戻ってこなくなるかもしれないわ。触らないで様子をみましょう」

お母さんにそう言われた妹は、学校から帰ってきたお兄ちゃんに仔猫の話をし、二人でカーテンの隙間から仔猫のいる衣装ケースを見張ることにしたのでした。

しばらくして、庭にお母さん猫がやって来ました。

妹とお兄ちゃんは、お母さんと相談してお母さん猫のご飯を用意しました。

赤ちゃん猫におっぱいを飲んでもらえるように、お母さん猫にはたくさんご飯を食べて欲しかったのです。

妹とお兄ちゃんがいつもの様にカーテンの隙間から見ていると、お母さん猫はご飯を全て食べ終わって衣装ケースに入っていくところでした。

これから赤ちゃんにおっぱいをあげに行くのでしよう。

妹とお兄ちゃんは衣装ケースの中を覗いて見たくてたまりませんでした。我慢しました。

二人は、仕事から帰ってきたお父さんに今日の出来事一部始終話して聞かせました。

お父さんも仔猫の誕生に驚きながらも興奮した様子でしたが、少し声を落として「仔猫たちはどうなるかな……」とつぶやきました。

妹は、「仔猫たち、ウチで飼おうよ！」と言うと、お父さんとお母さんは少し顔を見合わせた後言いました。

「ウチでは猫は飼えないよ。それに仔猫だけ、一匹だけというわけにはいかないよね」

「お母さん猫が連れていくと思うわ。それまで見守ってあげようね」

お兄ちゃんはそれを聞いて「そうだよな。しょうがないよな」と言いましたが、妹は違うことを思っていました。

「お母さん猫が赤ちゃんたちを連れてどこへ行くんだらう？ どうやってご飯を食べるん

だらう？」

けれど、妹は思ったことを口に出さずに黙っていました。

それからしばらくの間、お母さん猫の姿が見えない時に、お母さん猫のご飯だけを置いておくようにして様子を見ていました。

時々カーテンの隙間から食事の風景を眺めて、いつ仔猫がケースから出てくるのかを心待ちにしていました。

でも、なかなか出てきません。

早く仔猫たちを見てみたい気持ちが日に日に高まっていました。反面、衣装ケースから出て来て欲しくない気持ちもあるような気がしていました。

仔猫を見つけて一週間程経った頃、「ウチの庭にいる猫の親子なんだけど……」とお母さんがクラスメイトのお母さんと電話で話しているのを聞いてしまいました。

「そのまま居つかれるのも困ってしまう。ウチでは飼えないし。どこかへ引き取ってもら

うことを考えた方がいいかしら……」

妹は「どこか行ってどこ？ お母さん猫と仔猫を離してしまうの？」

心臓がドキドキしてきた妹は、近くに住む仲良しの友達に相談しました。

「このままだと猫たちはバラバラにどこかへやられちゃう」

「先に飼ってくれる人を見つけたらどうかな？」と友達が言いました。

「そうか！ そうすればいいのか。その手があつたね！」

早速その友達は、猫が好き、猫が飼いたいと言っていた人に連絡を取る準備を始めました。

「写真ある？ やっぱりどんな猫なのか見せた方がいいと思う」と言われた妹は、そういえば、最初に衣装ケースの中で見たつきり赤ちゃん猫を見ていないことに気付きました。

写真はあつた方がよいよねと思い、止められていた衣装ケースの中を見てみることにし

ました。

念の為、お母さん猫が庭にいないことを確認して、衣装ケースの引き出しをそつと引張って開けました。

最初に見た時の小さな黒い毛玉が、大きな毛玉になってそこに居ました。

三匹とも真っ黒でお母さん猫によく似た仔猫たちでしたが、一匹は首に白い模様が入った子。もう一匹は足の先に白いソックスを履いた子で、残った一匹は本当に真っ黒な黒一色の子のようでした。

モゾモゾと動く三匹の仔猫をしばらく眺めていましたが、写真を撮ることを思い出して、慌てて何枚か携帯のカメラにおさめました。

直ぐに撮った写真を友達に送ったところ、「黒くて顔が良くわからないけど、心当たりを送ってみるよ」という頼もしい言葉が返ってきました。

何故か、「もうこれで安心だわ！」とホッと胸を撫で下ろしたのです。



仔猫を引き取れる人が見つかるかもと友達から連絡がきたのは、それから二、三日後でした。

聞くと、同じ学校のKちゃんのお家。一度も同じクラスになったことはないけれど、勿論名前も顔も知っています。

Kちゃんは仲良しのMちゃんの幼馴染で、前からずっと猫を飼いたいと言っていたらしく、写真を見て「飼いたい！」と返事がきたと。

ただKちゃんのお家は猫を飼ったことが無く、仔猫三匹は無理だと思おうと言っているのが気になりました。

「やっぱりみんな一緒には飼ってもらえないのかな……」と残念な気持ちと、少しホッとした様な何とも言えない気持ちになったのです。

その夜、帰ってきたお父さんとお母さん、お兄ちゃんにKちゃんの話をしました。

お父さんとお母さんは「一匹でも仔猫が貰

われたらいいね」と喜んでいましたが、妹は黙っていました。

翌日、いつもの様にお母さん猫の食事を用意して庭に置きました。

いつの間にか食事を用意するのは妹の日課になっていたのです。

そして、いつもの様に庭に誰もいないことを確認しながら、お母さん猫がどこから現れました。

食事をする様子を見守りながら、「いつまでこうしてられるかな……」と考えていました。

その日の午後、Mちゃんから電話があり、「Kちゃんのおウチ、仔猫を三匹とも引き取ってくれるって！」とビックリする様な話が届きました。

勿論仔猫と一緒に貰われるのは嬉しいことです。

でも、なぜか手放しで喜べない自分がいましました。

それからトントン拍子に話は進み、仔猫たちが引き取られる日がやって来ました。

「今日の夕方、Kちゃんがお母さんと来る予定よ。本当に良かったわ。安心ね」とお母さんが言った時、急に雨が降り出しました。最近よくあるゲリラ豪雨のような凄い雨です。

「仔猫が風邪をひいてしまうわ。中へ入れましょう！」と慌てて衣装ケースを室内に入れようとした時、中に仔猫が一匹しかいないことに気がきました。

「仔猫が一匹しかいないわ。どこに行ったのかしら？」お母さんは慌てて庭中を探しましたが見つかりません。

「お母さん猫が連れて行ったのかしら？」

妹はそれを聞いて「そうだ！」と直感で感じました。

お母さん猫はきつと、仔猫が連れていかれる。離されてしまう。と分かったんだと妹は思ったのです。

残った一匹もきつと連れていくつもりだっ

たに違いありません。

でも、この大雨で来ることが出来ないのだと思いました。

「お母さん、きつとお母さん猫は仔猫を迎えに来るよ。雨が止むまでここで預かろうよ。離すのは可哀そうだよ」

一生懸命お母さんに伝えました。

お母さんは妹が話し終わるまでじつと聞いていましたが、静かに話し始めました。

「確かにお母さんと離れるのは辛いかもね。まだおっぱいもいっぱい飲みたいだろうし、兄弟も一緒に居たいと思うわ。でもね。お外で生活するってことはとっても大変で危ないことよ。こんな大雨が降っても屋根もないところで過ごさないといけない。病気になるっても病院にも行けない。Kちゃんのママと話していたんだけど、お母さん猫も引き取れないかという話も出ていたのよ。猫を飼いたいと思った時から保護猫団体に見に行ったりしていたんですって。そこに相談してくれていた

みたい」

妹はその話を聞きながら涙がこぼれてきました。

自分が預かろうと言ったのは、飼えないとわかっていながら猫をそばに置きたかったからで、自分の気持ち優先でちっとも猫たちのことを考えていなかったことに気付いたからです。

お母さんは、「野良猫のお母さんが連れて行ってしまったのならもう戻ってこないかも知れないわ。大雨で来れないし、この仔だけ外に置いておくことはもうできないしね。残念だけど……」

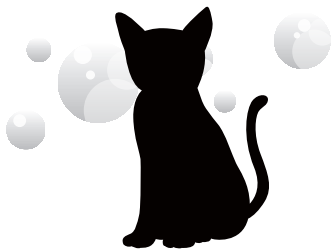
一匹だけ残った黒い仔猫を見て、せめてこの仔だけでも【ずっとのおうち】を見つけたら、それを喜ぶべきなんだと思っただけです。

大雨が止んで、Kちゃんとお母さんがキャリーバックを持って仔猫を迎えにきました。

一匹になってしまった仔猫の話聞いて、本当に残念そうにしましたが、手のひら

に乗るくらいの小さな仔猫を両手で大事そうに包み込んで「大切に育てるね。万一他の猫たちが庭に来たら知らせて欲しい」と言い残して帰っていきました。

お母さんの言う通り、多分もうここには戻ってこないだろうけれど、もしもう一度逢えたら「仔猫が一人で待ってるよ。【ずっとのおうち】に一緒に行こう」と伝えたいと庭に残った衣装ケースを見ながら、その日ずっと考えていました。



《優秀賞・一般の部》

## 随想部門

### 心のバリアフリー

細川 佳織

三年前の寒い初冬の朝、父に病が襲いかかった。朝食の最中に、ダイニングの椅子に座ったきり、立ち上がることができなくなってしまう。

「なんかおかしい」

母は、父の異変に気付き、救急車を呼んだ。父は車で5分程の、近くの市民病院へ運ばれた。しかし、そこでは手に負えず、隣の市の脳神経外科のある総合病院へ運ばれた。

脳梗塞だった。

その日すぐに、私は脳神経外科のHCUにかけつけた。ベッドに横たわった父は、たくさんチューブにつながれていた。意識はあり、会話することもできた。十日くらいで普通の病室へ移され、家族も皆、安堵した。年末年始も父は退院することができず、入院生活を続け、新しい年が明け、しばらくしてから、入院していた脳神経外科と同じ系列のリハビリ病院へ転院した。四ヶ月を超えるリハビリのおかげで、父は何とか、室内では歩行器を使って歩くことができる程回復した。

しかし、高次脳機能障害となり、歩行が不安定な為、外出には車椅子が必要となった。入院中に受けていた介護認定では、要介護3という認定がおりた。

父が退院し、家に帰ってくる事ができたのは、ゴールデンウィークを過ぎてからのことだった。

入院中に家を改造し、玄関の門をとり払い

手すりをつけた。市の補助を受け、玄関の三和土のところにも手すりをつけ、トイレは、ドアから引き戸にかえ、手すりをつけた。歩行が不安定な父を迎える為、車も助手席の椅子が外まで出てくるタイプのスライドドアの小さな車に買い替えた。

父が退院の日、仕事を休んで母に付き添い父が入院していた病院へ父を迎えに行った。

車椅子の父を車に乗せるところから、大変だった。母と私と二人がかりで、長い時間をかけて父を車に乗せ実家へ帰宅した。

父が実家に戻ってくると生活が一転した。

父は字が書けなくなり、計算もできなくなっていた。言葉が出にくくなり、母が言っていることを理解できていて返答ができないのか、理解することすらできないのか、わからなかった。

父が脳のどの部分にダメージを受け、何が理解でき何が理解できないのかわからず、私

達家族は困惑した。

介護のほとんどを母が担うこととなった。朝起きてから、夜ベッドに入るまで、一つ一つの行動に、今までの倍以上の時間がかかった。

母のイライラは募り、父がデイサービスに行っている間に、買い物、母自身の通院、美容院等を済ませるような、時間に追われる生活が続いた。

父が通院する為、外出する時には、私達子どもがかり出された。車椅子での通院が、こんなに大変だということに初めて気付いた。特に雨の日は、最悪だった。

六月初めの土曜日、退院後初めて、父のかかりつけの歯医者へ行った。その歯医者は、車椅子の患者に対応しておらず、母、兄と私の3人で父を連れて行った。

かかりつけの歯医者は、入り口から階段があり、車椅子の父を3人で抱えて、やっとの

思いで待合室へ運んだ。待合室は狭く、車椅子の父の他に、介助をする3人が入るとさらに狭くなった。

先に待っていた若い女の子が、名前を呼ばれて診察室に入っていた。

その時

「チッ」

という舌打ちが聞こえた。

私は母と兄と顔を見合わせた。

(あれは私達に対する舌打ちだよねえ)

3人ともきつと同じことを考えていた。

その女の子が診察を終えて、待合室に戻ってきた時、母は

「ごめんねえ、狭いのに車椅子で邪魔して」

と謝った。

女の子は、そっぽを向いて、会計を済ませて出て行った。

残された私達は、ひどく嫌な気分になった。

今まで長い間父が通ってきたかかりつけの歯医者ではあったけれど、このことがあってか

ら、通うことをやめた。もっと家に近く、入り口にスロープのある歯医者へ通うことにした。そこは、待合室も広く、車椅子のまま、待合室で待っていても、他の患者さんの邪魔になることは少なく、診察室へも、車椅子のまま入ることができた。

父の外出を考える時、駐車場は広いか、入り口等にスロープがあつて、バリアフリーとなつているか、トイレは広いか等、事前に調べることが増えた。電話で問い合わせることもある。丁寧に応じてくれる所もあるが、それとなく来てくれるなど言っているかのようには邪険に対応されることもある。

父の外出の機会は徐々に減っていき、通院以外は外出することもなくなつた。

人は若くても、年を重ねても、いつ病気になるか、普通生活を送ることが難しくなつた人達すべてに優しくして下さいと言っているわ

けではない。しかし、最低限、邪魔者扱いしないで欲しい。

市役所、駅、学校等、公共施設のバリアフリー化は確実に進んでいる。それと同時に、人の心のバリアフリーも進んでいって欲しいと思う。



《優秀賞・学齡児童生徒の部》

随想部門

物忘れ

笠原 世莉奈

私には、九十才になる、ひいおばあちゃんがいます。

ひいおばあちゃんは、おばあちゃんと二人で、くらしています。

血はつながっていません。

ひいおばあちゃんは、お父さんのお父さんのお母さんだからです。

私は、ひいおばあちゃんの家にとまりにいきます。

ひいおばあちゃんは、私によく

「物がなくなつた。」

と、言ってきました。

それに、さつき言ったこともよく忘れてしまっています。

毎回なので、私はおかしいなと思っています。

ある日、ひいおばあちゃんが、おばあちゃんに、物をとられたり歯みがき粉を使われるんやと、言ってきました。

おばあちゃんは、そんなことするはずがないので、家に帰って、お母さんに言ってみました。

すると、お母さんは、

「実は、ひいおばあちゃんは九十才で、軽い認知症だと病院で言われているから、そういうことを言うんだよ。おばあちゃんは、物をとったりしてないから、安心して。」

と、教えてくれました。

私は、安心したのと、ひいおばあちゃんが病気と知り少しびっくりしました。

でも、学校の総合の時間に認知症の勉強を



していたので、少し納得しました。

去年の九月、おばあちゃんが、ひいおばあちゃんに、どろぼうあつかいされて、私の家に二カ月来ていました。

その時に病院に行き、しん断されて分かったそう、私のお母さんは、介護福祉士なのでひいおばあちゃんが、お母さんの仕事場に通えるように手続きをしたりして、今は、皆さんで仲良くくらせています。

やっぱり、困ったときは、プロの人に相談して解決するのが一番だなと思いました。

これから、ひいおばあちゃんの病気は、どんどん、悪くなるとお母さんが言っていたけれど、私に、何ができるか考えてみると、やっぱり、今まで通り会いに行つて、少しでも話をしたりして、優しくすることが一番だと思うので、がんばりたいです。

ひいおばあちゃんは、今、一番幸せだそうです。

デイケアも楽しいそうで、笑顔がふえまし

た。ひいおばあちゃんがこれからも、幸せにくらせる世の中であつてほしいと思います。





わたしのあたまはゆっくりだ  
ひとつのことを考えるとそのことだけを  
考えはじめてしまう  
ふたつのことは一緒に考えられない  
止まってしまふ、ときもある

電車の中ではそわそわして  
じっとしていられない  
そんなとき  
こんなとき  
温かく見守ってくれる人たちがいる

たとえば何かの手続きをしているときに  
わたしはピタッと固まってしまったりして  
その人を困らせてしまう  
けれどその人は少しも怒らずに  
「大丈夫ですよ」  
と、言ってくれる

たとえば電車の中で居心地が悪くなつて  
そわそわそわそわと動いてしまふとき  
ちらりとこちらを見る人がいる  
それでも、わたしについた  
ヘルプマークを見てすぐに  
「大丈夫」  
と、やさしい顔になる  
そんなやさしい人ばかりじゃないけれど  
でも  
わたしはやさしい人たちに囲まれて  
生きている

生きている

今日も下を向かずに歩けました

今日も「ありがとう」がたくさん言えました

今日もやさしい人がたくさんでした

おひさまみたいにやさしいこの街が

ずっとずっとこうでありますように

ずっとずっと





《優秀賞・学齢児童生徒の部》

詩部門

キャンバス

近藤

葵<sup>あおい</sup>

私が描く私だけのキャンバス

毎日増えていく新しい色

その中心には必ず私がいる

私がいないと成り立つことのない絵

周りの人がいないと成り立つことのない絵

真っ白なキャンバスに私の色をのせる

周りには

家族の色を

友だちの色を

学校・習い事の先生の色を

お世話になった人たちの色

私に影響をあたえてくれた人たちの色

近所の人たちの色

私のキャンバスにはたくさんの色がついて  
る

周りにはたくさんの方がいる

しんどい時、泣きたい時だってあった

でもそういう時、私はいつもこのキャンバス  
のことを思い出す

周りにはたくさんの方がいる、一人じゃない

と思えて安心する

あなたのキャンバスは？

色が少なくても増やしていけばいい

好きなもの、事を探すだけでいい

そうすれば、色は増えていく

私の絵はまだまだ完成しない

あなたの絵も早くに完成して欲しくない

これからもっと彩りを豊かにしていきたい  
だから

自分を大切に

周りの人も大切に

一人で生きていけるほど強い人はいない  
たかさんの人に支えてもらいながら毎日必死  
で、でも楽しく生きている  
もし、しんどくなったら思い出して  
あなたしか描くことのできない世界でたった  
一つのキャンバスを



《優秀賞・一般の部》

## 創作童話部門

よい子の似顔絵

松末 真理子

森のどうぶつ村にある学校の、うさぎちゃん  
の担任のくま先生は、勉強のできる子にも  
できない子にも、運動のできる子にもできな  
い子にも、やさしい子にも意地悪な子にも、  
いつも分けへだてなく接するやさしい先生で  
した。

くま先生は、また、似顔絵を描くのがとて  
も上手で、いつもまんがやテレビのキャラク  
ターの絵を描いていて子どもたちの人気者で  
した。いじめっ子のきつねくんは、まんがが  
大好きだったので、先生が似顔絵を描き始め

ると、いつも一番前を陣取ってそれを見てい  
るのでした。

ある日、きつねくんは、良いことを思いつ  
きました。

「ねえ、くま先生。オレの似顔絵も描いてよ。  
ヒーローみたいに描いて！」

すると、みんなは、

「ええ！ きつねくんだけ、ずるい！ いつ  
も、自分ばかり！」

と、文句を言いました。くま先生は、につこ  
り笑って、こうおっしゃいました。

「そうだね。じゃあ、こうしよう！」

先生は、みんなを集めてお話しました。

「先生は、みんないい子で好きだよ。どの  
子にもいい子でいてほしいから、良いことを  
した子に、表彰状の代わりに似顔絵を描いて  
あげよう。たくさんは描けないから、一週間  
の間に一番たくさん良いことをした子、一人  
だけね。忘れ物をしない、ゴミを拾う、棚の

片付け、本をそろえる、何でもいいんだよ」  
聞いていたきつねくんは、大喜びで言いました。

「それならオレにもできるぞ！ 勉強はできないけど、ゴミ拾いならできるぞ！」

「良いこと週間」がやって来ました。きつねくんは大はりきりで、毎日毎日、休み時間のたびに、学校中のゴミを拾って回りました。そして、いちいち先生に、

「また拾ってきたよ！」

と、報告するのです。きつねくんがゴミを拾ってくるたびに、くま先生は、クラスの「良いことカード」のきつねくんの欄に、シールを貼ってやりました。

一週間後、くま先生から発表がありました。「今月の「良いこと大賞」は、シールが一番多かったきつねくんです！ きつねくん、おめでとう！」

きつねくんをヒーローに見立てた、大きな

額に入った似顔絵が渡されました。額の中の似顔絵も、それをもらったきつねくんの嬉しそうな顔も、キラキラしていました。

「良いこと週間」が過ぎて、普段の学校生活が戻りました。良い子のごほうびをもらったきつねくんは、もとの意地悪なきつねくんに戻っていました。友だちの手さげかばんをけって回ったり、ある時には平気でゴミをゆかに捨てたりしていました。

次の月の「良いこと週間」がやってきました。きつねくんは、また大はりきりでゆかのゴミを拾ったり、落ちている友だちの持ち物を拾って届けてあげたりしていました。それはもう、すばらしい良い子ぶりでした。

一週間後、くま先生から発表がありました。「二回目の「良いこと大賞」は、またきつねくんでした。みんなも頑張っただけね！」

二回目のごほうびの額には、今度は前と違

うヒーローに見立てたきつねくんが、生き生きと描かれていました。

次の月も、またその次の月も、〃良いこと大賞〃の額をもらったのは、きつねくんでした。

でも、〃良いこと週間〃が終わって、念願の似顔絵を手にしたとたん、きつねくんは、そのたび悪い子に戻っていくのです。みんなの中に、おもしろくない気持ちも、ふつふつとたまっていきました。

ある日、くま先生のとこに、正義感の強いうさぎちゃんがやってきました。

「先生、きつねくんが良い子なのは、〃良いこと週間〃の一週間だけです。似顔絵をもらったとたん、もとの悪い子に戻っています。ゴミも平気で捨てています。それなのに、〃良いこと大賞〃をもらうのはおかしいです」

くま先生は、うさぎちゃんの頭をなでながらおっしゃいました。

「そうだね。うさぎちゃんの言う通りだね。先生も分かっているんだよ。でも、前とちがっているのは、きつねくんは、一週間だけでもいい子になってくれていたことなんだよ。」

うさぎちゃんは、言い返しました。

「それは、本当のきつねくんではありません。ごほうびがほしいからやっているだけです」

「それも、わかっているんだよ。でも、もう少し様子を見させてくれないかい」

そう言って、静かに微笑まれました。

納得のいかない苦虫をついたような気持ちで、二学期が始まるうとしていました。

始業式の日、学校にくま先生の姿はありませんでした。みんなが聞いたニュースは、くま先生は、家庭の事情で急に学校をおやめになることになった。〃〃という知らせでした。先生のが大好きだったみんなは、声を上げて泣いていました。うさぎちゃんも泣きま



した。

新しい先生が来て、〃良いこと週間〃もすっかりなくなり、三か月が過ぎました。

ある日、うさぎちゃんは、廊下の向こうの方で、何かしているきつねくんを見つけた。じっと見ていると、とまどいながらも誰も見ていない廊下で、ゴミを拾ってゴミ箱に捨てているきつねくんがいました。うさぎちゃんは思わず駆け寄って、

「きつねくん、今、ゴミを拾っていたの？」と聞きました。きつねくんは、恥ずかしそうにうなずいて、言いました。

「くま先生はもういないけど、どこかで見ているような気がして、ゴミを拾ったらほめてくれるような気がして、気がついたら拾っていたんだ。そしたら、なんだか胸がスツとして、なんだかすごくいい気分なんだ」

そう言って、きつねくんはにっこり笑いました。それは、今まで見たこともないような、

似顔絵をもらった時以上の、キラキラした笑顔でした。くま先生に見てほしいぐらいの、とびきりの笑顔でした。うさぎちゃんは、くま先生のまいた種が、今、花開いたような気がしました。



《優秀賞・学齡児童生徒の部》

## 創作童話部門

ぼくはロボット

船引 里音

ぼくはロボット。博士につくられた、お手伝いをするロボット。ぼくがつくられてからおよそ一年、村はずれの小さなラボで博士と一緒に暮らしている。ぼくは博士の研究のお手伝いをしている。助手みたいなことをしている。博士はいつも優しい。博士はいつもぼくと一緒にいてくれる。ぼくは博士が大好きだ。

ある日、ぼくはラボから離れることになった。なぜなら、村のある家族のお手伝いをするることになったからだ。その家族は両親と一

人の幼い息子がいる。両親は共働きで、男の子は小学校から帰るといつも家に一人であるそう。男の子を毎日家で一人にしておくのは不安だ、何かあったら大変だという両親の願いを博士は引き受け、ぼくをその家に送ることになった。ぼくの仕事は家に一人の男の子を見守ってお世話をすること。博士と離れるのはとても悲しいけれど、さびしいけれど、ぼくは頑張る。

今日から新しいぼくの生活が始まる。その家族はぼくをあたたくかかえてくれた。明日、男の子は学校に行く。帰ってきたら、ぼくが見守るんだ。

次の日、男の子が小学校から帰ってきた。すると、男の子はぼくに話しかけてきた。

「ねえ、ロボットくん。君は何ていう名前なの？」

「ねえ、ロボットくん。君は何歳なの？」

「ねえ、ロボットくん。君はどんな食べ物が好きなの？」

男の子はロボットのほくに興味津々で、たくさん質問してきた。ほくはその質問に全ては答えることができなかった。まだ知らないこともある。それにほくは食べ物を食べない。電気で動くからね。ほくが質問に答えられなかったり、あべこべな答えを言ったりすると男の子は

「ちゃんとしゃべってよ！」

と言い、ポカッとほくの頭をなぐった。ほくの体は頑丈だけれど、少しだけ体がガクツとなった。

それから同じような日々だった。男の子は嫌なことがあったら、すぐにほくをなぐったり、けつたり、たたいたりした。ほくは悲しくなった。ほんとうに、ほんとうに、悲しくなった。ロボットだから涙は出ない。でも、心の中では泣いていた。

ほくは逃げ出した。あの家から。男の子は学校に行っていて、家にはほく一人だった。

もうダメだ、と思って気がついたら家の玄

関から出ていた。博士のもとに帰ろう、そう決めたほくはラボに一目散に走り出した。人通りの多いところはさけた。見つからないようにするために。雨の日は家やお店の屋根の下を通った。体が雨に濡れないように。そして、ほくは走った。早く博士に会うために。

走って、走って、ほくはようやく博士のラボにたどり着いた。でも、ラボの中は博士が作業をしている音はない。博士の寝室に行くと、ベッドの上には博士がせきをしながら横たわっていた。ほくは博士、と力なく言った。博士はそのほくの声に気がついてほくを見た。博士は言った。

「大丈夫だ。ちよつとした風邪だよ。心配しないでくれ。それより、どうしてうちのラボに帰ってきたんだい？」

ほくはあの家にいたころのことを全部話した。家族がほくをあたたくかえてくれたこと。でも、男の子にたたかれたり、なぐられたりしたこと。それで、ほくが悲しくなっ

たこと。全部、全部話した。そうすると博士は、

「君は私のほこりだよ。今までよく頑張ったね」

と言つて続けた。

「家族に家を出たことを謝るんだよ。その次に、君がなぜ家を出たのか、男の子に傷つけられて嫌だったことを話すんだ。男の子がわかるよう伝えるのさ」

博士はコホンつとせきを一つした。少し苦しそつだった。

「男の子は不満があつて君を傷つけたのかもしれない。だけどね、その男の子は心の底では君に感謝しているかもしれないよ。見守つてくれてありがとうつてね。それに、その子の両親も君に感謝しているに違いないさ」

博士はそう言つてまたせきをした。ぼくは気がついた。そうだ、ぼくは感謝されているかもしれない。それに、今の博士みたいに、今、男の子が風邪をひいてしまつてい

られない。早く家に戻つて男の子を見守らないとダメじゃないか。

ぼくは大急ぎで家に戻つた。もう夕暮れの時間で、両親は家に帰つていた。もちろん、男の子も家にいた。ぼくは言つた。

「急に家から出てしまつて、ごめんなさい」  
家族は少しおどろいた様子でぼくを見つめた。それから、ぼくは続けた。男の子がぼくを傷つけて、ぼくが悲しくなつたこと。これからは、ぼくを乱暴にあつかわないでほしいこと。すると、それを聞いた男の子は言つた。「ごめんなさい。君を傷つけてしまつて。これからは、君を大切にあつかうから。ごめんなさい」

ぼくは何だか心があたたかくなつてきた。博士の言う通りかもしれないと思つた。

その日から、ぼくは男の子に傷つけられることはなくなつた。とても楽しい日々だつた。男の子としりとりをして遊ぶようになった。

それから数日が経ったある日、ぼく宛てに一通の手紙が家のポストに入っていた。それは、大好きな博士からの手紙だった。

ロボットへ

君は元気になっているかい？

家族と仲良く生活できているかい？

私は風邪が治って、元気になったよ。

君も、これからも元気で頑張るんだよ。

私はいつも君を応援しているからね。

博士より

ロボットだから涙は出ない。でも、心の中では泣いていた。とてもうれしい、博士からの手紙だった。



令和4年度 人権問題文芸作品

『のじぎく文芸賞』

発行 令和4年12月  
編集 公益財団法人兵庫県人権啓発協会

〒650-0003

神戸市中央区山本通4丁目22番15号  
兵庫県立のじぎく会館内

TEL 078 (242) 5355

FAX 078 (242) 5360

発行者 兵庫 県

印刷 (株)興正社  
公益財団法人兵庫県人権啓発協会

